
私立鶴城ヶ丘高校異能力研究部

夏目玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立鶴城ヶ丘高校異能力研究部

【Nコード】

N8551T

【作者名】

夏目玲

【あらすじ】

母親が投薬されたことによって生まれた『超能力者』の涼原那雲は、その力ゆえに、孤独な毎日を送っていた。だが、高校入学二日目。同じ超能力者を集めた『異能力研究部』に勧誘されたことにより、止まっていた時間が動き出す。関西弁乱暴美少女とか、毒舌女神さまとか、八つ橋とか、アンドロイドとか…平凡な高校で生活する、超能力者たちの恋と戦いの物語。

1、その少年はヤツらと出会う（前書き）

初めまして。夏目玲と申します。

超能力モノはずっとやってみたかったので嬉しいです。

自分にも超能力があったら…

ただし私自身、文才というものに全く恵まれていないため、勝手に謎を増やしてしまったり、複線が回収できなかつたりと見苦しい所もあります、それでも見てやる！という心の広い方はどうぞ見てやってください。

只今絶賛受験生中（？）なのでどこまで行けるか分かりませんが頑張ります。

1、その少年はヤツらと出会う

か細い呼吸音だけが暗い室内に響いていた。

声の主の女性には玉のような汗がびっしりと浮かび、時折訪れる激痛に身をよじる。

見かねた一人の看護師が妊婦に近寄ろうとしたが、それを隣にいる医者が制した。

妊婦の体には数本のチューブが取り付けられており、その中を不気味な液体が行き来する。

寝かせられているのも、何年も使っているであろうボロボロのベッド。

いや、そもそもこの病院事体がお世辞にも清潔とはいえない。

誰が見ても異様な光景だった。

妊婦は大変デリケートなため、特に出産の際には最新の注意をはらう。

一つでもミスを犯すと、胎児にも異常が出るためだ。

それにもかかわらず、この病院ではそのような気遣いは一切施されていないかった。

傷だらけのベットに横たわっただけの妊婦。

当然、本来の出産よりも倍以上の苦痛を味わらなければいけない。

痛さと苦しみに身をよじる妊婦を、医者はじっと見つめる。

「——『あれ』はもう投入したか」

不意の質問に、隣にいた白衣の男性は慌てて答える。

「は…はい！二分四十秒前に…今のところ、拒絶反応はありません！」

「なら良い」

医者は、ニヤリと口が裂けるかのような笑みを浮かべた。

直後だった。

絶叫が響く。

痛みと苦しみと憎しみ、それをすべて吐き出すかのような絶叫。妊婦の瞳は血走っており、口から大量の鮮血が零れた。

「――よし」

その一言で、数人の白衣の男が妊婦を取り囲む。

間もなく聞こえるのは、生まれたての小さな命の産声。

血まみれの胎児をゆっくりと抱き上げると、白衣の男たちは別室に逃げるようにして去って行く。

その様子を満足そうに見ていた医者に、恐る恐る看護師が声をかける。

「あ…あの…女性の方は…」

「ん？ああ、そっちで勝手に始末してくれ。父親の対処と同様にな」

「は…はい…ッ…！」

恐怖で震える声の看護師に目も向けずに、医者はその部屋を後にした。

コツコツと、暗い廊下に足音だけが響く。

医者は邪悪な笑みを浮かべる。それでも足りずに笑声が漏れた。

「ハハ…ハハハ…上手く…上手くいけばあの子は…あの子は…ッ！
」

——時刻は、九月十八日午前三時五十八分。

空は、今日も澄みきっている。

少年は机につつぷした体制のまま、ぼんやりと焦点の合わない目で教室の外を眺めていた。

桜の花びらとともに、春の香りがうつすらと匂ってくるような感じがする。

静かに流れゆく雲。時折視界に入る鳥たち。

少年はそれを見ながら、訪れる睡魔に身をゆだねようと瞼を閉じかける。

が、そこで。

「あ、あの…涼原君…だよね…？」

震える声で言葉をかけられた。面倒くさそうに視線だけを横に向ける。

怯えていますといわんばかりの表情をしているのは、少年のクラスメイトの女子生徒だったか。

『だったか』などという曖昧な表現をしているのは、まだ高校に入学して二日目だからだ。

もともと他人に興味がない彼が、クラスメイトの顔など覚えている訳もない。

「あア？」

少し声を荒げただけで、ビクツと女子生徒が震えたが、それでも負けずに話しかけてくる。

後ろの方で、友達と思われる人物が『頑張つて！』と応援しているのが見え見えだ。

「あの…ま、前の時間にやった自己紹介カード…出してないの、涼原君だけ…だから」

チツ、と舌打ちをした。新品の机から適当に丸めた自己紹介カードを取り出すと、女子生徒に放り投げる。

カードを手にした女子生徒の目がびっくりしたように開かれた。

「えつと…これ、何にも書いてない…けど…」

「うつせーな、とっとと消えろ…！」

一際大きい罵声に、ヒッ！と女子生徒の喉がなった。ほとんど半泣きの状態で、逃げるように去って行く。

その姿を見送ってから、彼——涼原那雲は再び机につつぶした。
すずはひなくも

伸びっぱなしの黒い長髪（学校では校則違反）に人を射抜くような鋭い瞳。

さらに高校の入学式からまだ一日しか経っていないのに、『学ラン着用』という校則を無視して黄色とピンク色の派手なパーカーを着ていた。

フードは何故か防災ずきんのようにすっぽりと頭を覆っている。

下はかるうじて規定のズボンを履いているものの、完全に腰の辺りまで下げてあり、何やらチエーンのような飾まで取り付けてあった。顔立ちは悪くないのに、いかにも『不良です』という恰好をしている人は人も寄り付かない。

現に、あの女子生徒の反応だってそうだ。

だが、那雲はこれでよかった。

自己紹介カードだのなんだの、もともとクラスメイトとなれ合う気などさらさらない。

自分がかかわったところで何だというのだ。

どうせ、壊してしまうんだから。

ならば、最初から断ち切ってしまった方がいいに決まっている。

誰にも心を開かず。

「……ッ」

一つ舌打ちをすると、乱暴に椅子から立ち上がる。

周りの生徒達は那雲がいきなり行動したことに驚いているのだろう。ヒソヒソと何かを話し合っている。

だが、そんなのをいちいち気にしていられない。

教室を出て、古臭い臭いのする廊下を歩く。

那雲は上に、上に向かった。

学校の最上階、すなわち屋上へ。

半分錆びているドアを開ける。キィ、と甲高い音がした。

ドアを開けると、心地よい春風が那雲の頬をくすぐった。

溜息をこぼすと、背伸びをする。

屋上と呼ぶだけあって、何もない空間だった。黒く変色したタイルがしきつめられている。

四方はフェンスで囲まれており、まるでちっぽけな檻の中にいるようだ。

那雲は一応誰も入ってこれないように鍵をかけると、フェンスに両腕をつき体重を預ける。

空は青く、青く澄んでいた。綿菓子のようなふわふわの雲が浮かんでいる。

ここからは街が一望できた。

買い物帰りだろうか、乳母車をおした若い母親が小さく見える。

彼はそれを見ると、悲しげな笑みを浮かべた。

自分にもあんな頃があつたのだろうか。

そもそも、自分の両親はどんな人間だったのだろうか。

那雲は両親の顔を知らない。

母親は、自分を産んで死んでしまった。父親はそのショックで病院の最上階から飛び降りた。

母親の命を食らって生まれた子供。

彼は、いくつかの施設をたらい回しにされた。
だが、どここの施設も一年と持たなかった。

理由は簡単だった。

『超能力』

那雲は、生まれた時から異能の力を体に宿している。

初めてそれに気づいたのは3歳の頃だ。
子供のささいな喧嘩で、同じ施設に住んでいた子供に突っかかられた。

那雲は、その子供を軽く殴った。

子供の、まして3歳の幼児の力など大したことない。多分痣もできないほどの力の加減だっただろう。
だが。

その子供は遙か先の壁まで吹き飛ばされ、首の骨を折る重傷を負った。

大人達は那雲を恐れるようになった。

だが、小さい子供はどうしてそうだったのか理解できなかった。

僕は悪くない。

どうして、そんな怖い顔をするの？

どうして、僕だけ他の友達と会わせてくれないの？

どうして、僕から離れるの…？

『疫病神』『汚らしい』『悪魔の子だ』

その言葉の意味は理解できなかったが、自分は嫌われているというのだけは理解できた。

殴られたこともあった。

何もしていないのに。

子供は、ある日気づいてしまった。

ボクハ、イナイハウガイノ——？

苦しいよ。

悲しいよ。

痛いよ。

辛いよ。

助けて。

だが、小さな子供の声は誰の耳にも届かない。

そして、那雲は大人になった。

そして、分かったのだ。

誰にも関わらず、一人で生きて行けば。

自分は、人を傷つけてしまうから。

だから那雲は自ら『孤独』という道を選んだ。

後悔など、ない。

今だって、ちよつと頭の中で命令すれば風を操ることができる。物を浮かすことだってできる。

自分は、人とは違うから。

母親の命を食らって生まれた『化け物』だから。

俺は――

そこで、ふと那雲の思考は閉ざされた。誰かが、彼の後ろに立っていたから。

「……誰だ」

那雲は振り返らない。

ただ、一つ気がかりなのは。

「ドアには、鍵がかかっていたはずだ。どうやって入った」
すると、相手はその質問に対して軽く微笑んだようだ。クスリと笑う声が聞こえた。

早く答えない相手に那雲は苛立ちを覚えていた。一喝しようとした

が、相手に先手を打たれた。

「あなたと同じ超能力者、ですよ。涼原那雲さん」

「!？」

予想を大きく上回る言葉に那雲は振り返った。そして——息を飲んだ。

目の前にいたのは——とんでもない美貌を持つ人間だった。

触れただけで壊れてしまいそうな華奢な体。かなりの長身で、那雲よりも背が高い。

透き通った白い肌。ほんのり赤みを帯びた唇。長い睫に、肩まで伸ばした亜麻色の髪。

何より、その顔が整いすぎている。

だが、その女神と呼んでもいい人物は次の瞬間驚愕の言葉を口にする。

「あ、ちなみに僕は男ですよ。ホラ、ちゃんと学ラン着てるでしょ？」

そういつて、校則通りに整えられた学生服をひらひらさせた。

だが、顔立ちといい体系といい信じられなかった。

学ランは、その体の細さを強調しているようにしか思えなくて。

しばらくの間、那雲は息をするのも忘れてその場に立ちすくんでいた。

目の前の——自称男は、そんな那雲の様子を気に留めることもなく淡々と話す。

「貴方を僕達の部に勧誘しにきました。超能力者しか入部できない
『異能力研究部』にね」

> i 3 7 4 6 5 — 3 5 9 6 <

1、その少年はヤツらと出会う（後書き）

キャラクター紹介1

● 涼原那雲

風、大気、空気を操れる超能力者。通称『空気誘導』

鶴城ヶ丘高校一年生で、誕生日は九月十八日。

基本『なんちゃって不良』だが心の中ではそんな自分を嫌悪している。

生まれた時から両親はなく、ずっと孤独だった。

頭はいいのか悪いのか分からないが、妙にカンがさえる。

めんどくさがり屋で、テストはいつも鉛筆（九年間愛用）ころがしで決める。

マイペースで年甲斐がなく、カエルやクマ、ウサギといった動物グッズには目がない。あと裁縫とか女の子みたいなことが得意。

顔立ちはまあまあ美形だが、目が怖いのとファッションがおかしいので女子支持率は低い。

2、超能力という名の非日常

物事には、順番という物がある。

まず前置きから始まり、少しずつ本題へと事を進めていくというのが一般的であろう。

さらに誰かに頼みごとをすれば、相手に良い返事を言わせるように慎重に説得するのが普通だ。

だが、目の前の男とは思えない美貌を持つヤツは、どうやら常識というものが通用しないらしい。

「貴方を、異能力研究部に勧誘しに来ました」

イキナリ現れてイキナリそんなことを言われた那雲は、たつぷり十秒以上ポカンと立ち尽くしていた。
まるで状況が掴めない。

目の前に立ってこちらを真っ直ぐ見ている（自称）男は何者だ？

超能力者？

自分と同じ？

勧誘？

異能力研究部？

脳内がはてなマークで埋め尽くされる。

何とか頭をフル回転して状況を把握しようとした那雲だが、逆に混乱してきた。

そもそもここ鶴城ヶ丘高校には『異能力研究部』などという部は存在しないはずだ。

入学式の時に行われた新入生部活紹介を見ても、そんな妙な部はなかった。(もつとも、那雲は半分寝ていたので確信はないが。) ついに「脳」という小さなコップから溢れたはてなマーク。だがその混乱した思考を目の前の男の声が遮った。

「涼原那雲さん、貴方の生年月日は今から十五年前の九月十八日です
すね？」

「…あ、ああ」

とつさに答えてしまったため、声が震えた。

「実は僕も…というか『異能力研究部』の部員は基本九月十八生まれです」

「！？」

ますます分らない。那雲の疑問は増幅した。

「そしてその部員…といっても僕とあと一人の二人しかいませんが、は異能力の力…つまり超能力を持っている」

思考が追い付かない。

「まだ、分かりませんか？」

つ、と頬に冷たい汗がつたる。

「つまり」

そして、男は三泊ほど間を開けてこう言った。

「今から十六年、十五年前の九月十八日、この地域のある病院で生まれた子供は皆超能力を宿している」

視界が、黒く塗りつぶされた。

まともに、思考が機能しない。

自分と同じ境遇の人間が他にも？
だが。

「……てめえ」

湧き上がるのは疑問を通り越して、怒り。

勝手に現れ、求めてもいないのに勝手に説明されたこの男に、いや、そもそもコイツの言うことが本当なのかも分からない。自分をからかいたいだけなのかもしれない。

——かつて、自分を化け物扱いした奴らのように。
ギリ、と奥歯が鳴ったような気がした。

「ふざけんな！ いい加減なことばっか言ってるじゃねえええ……！」
気が付いたら、拳を振り上げていた。目の前の男に叩きこむ勢いで。

屋上のフェンスをばねにして、那雲は突進する。
刹那。

拳が、空を切った。

「は……！？」

その華奢な体に拳は接触していない。なぜならば。

男が、視界から一瞬で消えたから。

「威勢がいいのは結構ですが、やみくもに相手に暴力を奮うのは関心しません」

吐息がかかるほど近距離で囁かれた那雲は驚いて振り返る。

——いつの間に移動した？

男は、ニツコリと艶麗な微笑を浮かべると、振り上げたままの拳を優しく包み込んだ。

那雲は、目を見開く。

「ですが、貴方はスピードでは絶対僕に敵わない」
瞬間。

ヒュンツ、という軽い音と共に男が消えた。
文字通り、本当に消えた。

それは、実に鮮やかすぎる動作だった。

気が付くと、男は得意げな笑みを浮かべて遠くのフェンスの上に腰かけている。

そして、那雲は目を疑う光景を見ることになる。

何回も、その場から消えては別の場所に現れ、消えては現れるの繰り返し返し。

まるでケータイの連写機能で撮影したように一瞬で、消えては現れる。

男は最終的に那雲の目の前に現れると、疲れたのか肩をコキコキと回す。

「分かっただけました？僕は、一瞬で別の空間に移動することができる。物体を別の場所に送ることもできる。『瞬間移動^{テレポート}』という呼び方が一番ポピュラーですかね」

目を限界まで見開いた那雲は、震える唇を必死に動かし言葉を紡ぐ。

「お前…本当に超能力を…ッ!？」

「ええ」

即答だった。

さらに那雲に、その白く細い手を差し出して、

「部室に来てくれませんか？同じ超能力者として、私達と手を組んで下さい」

ザッ、と春風が舞った。桜の花びらも数枚運ばれて来る。

二人の視線が正面からぶつかった。

「…ッ…」

那雲が返答をしようと、口を開きかけた時だった。

ドガッシャアアアアン！！という派手な破壊音が耳をつんざいた。ほぼ同時に見事なくの字に折れ曲がった屋上の扉が宙を舞う。

そのまま破壊された扉は止まることを知らず、フェンスを軽々と飛び越えて遙か彼方へと消えていった。

那雲と男以外の第三者が、鍵のかかっていた扉を内側から破ったということに気付いたのは、もくもくと扉のあった場所から茶色の粉塵が舞ってからだった。

何か咳込むような声が聞こえたと思ったら、すぐに扉を破ったであろう人物からの罵声が飛んで来る。

「影也かげやあ！アンター一人でノコノコ出て行って何やっとなねん！！勝手な行動すんなって言うたやろ！！？」

可愛い声で乱れまくった関西弁が飛んで来た。

男——影也は困ったような作り笑いを浮かべると頭をかく仕草をする。

「仕方ないじゃありませんか、湖華こはな。今回ばかりは許してください

よ」

「いや、許さへんで！罰として部屋でウチにお茶でも入れてもらうからなー！」

と、そこで視界を覆っていた粉塵が晴れた。

扉が外れた入口の前で仁王立ちしていたのは、那雲よりも少し背が小さい少女だった。

だが、乱れた口調とは正反対のイメージの少女。

綺麗に波打った栗毛色の髪に、それを二つにまとめる上品なりボン。↑（絶対校則違反）

さらに規定のセーラー服は改造されており、スカートの裾や襟、胸元には何ともフリフリなレースが着けてあった。

顔立ちはかなり整っており、絵本に登場する姫のようだ。ハッキリ言う、微笑みかけられたらしばらく見とれそうな程である。

そしてタイは無理やりリボン結びにされていた。

一言で言うと、お嬢様オーラ全開。

ピアノの発表会に行くときよく見かける、ザマスの教育熱心なお母様と一緒に歩いてそうな少女だった。

本当にそこらへんを歩いていると、三秒で誘拐させられそうなほど金持ちそうな容姿だ。

那雲はこの時、絶対この女の家には専属の執事がいると確信した。

> i 3 7 9 9 5 — 3 5 9 6 <

色々なことが起こりすぎてポカンと口を開けている那雲に、影也が申し訳なさそうに説明した。

「えーと…この子は同じ異能力研究部の部員で、秋ノ宮湖華あきのみけなといいます」

言い終わった瞬間、その湖華とかいう女のケリでフェンスに叩きつけられる影也。

「影也は何でさも自分のことのようにウチの自己紹介しとんねん！そもそも『この子』って何や！！タメ同学年のくせに子供あつかいすんなー！！」

「い、いやでも湖華僕より頭一つ分は違うからチビ…」

「あーもうつつさいねん！！ちつとは黙らんかいこのドアホ！！」
またしても湖華の跳び蹴りが炸裂するが、影也は一足早く瞬間移動テレポートを使ってこれを逃れる。

その夫婦漫才のようなやり取りを見ながら、那雲は小さな声で呟く。

「…その女も、超能力者なのか？」

「ああ、あつたり前やろ？」

影也に向けた質問だったが、その声気付いた湖華が即答する。

「アンタ、那雲だっけか？分子ゆうモンは知つとる？」

首を縦に振った。あまり覚えてないが、中学で習った。

「ほとんどの物体は分子で構成されてるやろ？ウチはその分子の『数』を操れるんや」

「……」

イマイチよく分からない那雲に湖華はめんどくさそうな口調で言う。

「まあ…簡単に言うと、『物体の重さを変えられる』いうことや」

「重さ…？」

「ん…口で言うても分からんと思うから見せたる」

言うと、湖華は屋上のフェンスに触れる。

直後。

ボガッ！！というすさまじい音とともに、屋上の四方を囲むフェンスが持ち上がった。

「！？」

無理やりコンクリートから外されたフェンスの一部はひしゃけており、しかもそれを湖華は片手で持っている。

あのお嬢様みたいな華奢な身体の子によって、屋上には粉塵が立ち込めていた。

「今やったんは、このフェンスの分子の数を減らした。つまり、フェンスの重さを軽くしたことや」

「分子操作」

突然現れた影也が歌うような気軽さで言った。

「それが彼女の異名ですよ。物体の重さを操れ、たとえこの校舎であろつが小指で持ち上げてしまう」

「な…っ」

息を呑んだ。

本当にいたのだ。

自分と同じ『超能力者』が。

2、超能力という名の非日常（後書き）

キャラクター紹介2

●みその三苑影也

鶴城ヶ丘高校二年生。『異能力研究部』に所属している。

テレポルト瞬間移動の持ち主。

容姿はそこらの女に負けないほどの美貌を持っており、今までプロポーズ求愛された数は両手の指の数をゆうに超える。

また、その女神のような美貌とは裏腹で性格はかなり腹黒い。

苦手なものは勉強で、成績は下から一番目だか二番目だか。

誰にでも礼儀正しい。だが毒舌でDS。

3、機械人間Ⅱアンドロイド

「ん」

そう言つて湖華は、片手を緩やかに那雲に伸ばした。まるで長年の親友に握手でも求めるかのような仕草で。

彼女は、自身のことを『超能力者』と名乗った。なんの躊躇いもせずに。

どうやら彼女は、『異能力研究部に来ないか』と動作で訴えているらしい。

那雲はしばしの間沈黙する。

この手を取れば、異能力研究部の一員となる。だが、それは同時に『他人との関わりを持つ』ということだった。長年、人との繋がりを絶つてきた自分はそれでいいのか？

いや、目の前にいる二人は自分と同じ境遇にいたらしい。

この人達なら、分かってくれるのだろうか。汚れた自分を受け入れてくれるのだろうか。頼つてもいいのだろうか。

この人達なら――

那雲はゆっくりと、本当にゆっくりと手を伸ばした。湖華の方へ。

この手を取れば。

自分は。

自分は――どうなる？

もしも彼女達の仲間になっても、また同じことを繰り返してしまうのではないか？
誰かを無意識に傷つけてしまう。
そんな人間が。

本当に、人との関わりを持っても大丈夫なのか――？

『醜い子だ』

『もう、ウチでは預かれないよ』

『よそをあたってくれ』

『母親の命を喰らって生まれた、汚い化け物め――』

蘇る昔の記憶に、ビクッと肩を震わせた。

ダメだ。

俺は――

伸ばしかけた手を振り払う。

那雲は湖華達に背を向け、壊れた屋上の出口へと向かった。

「…俺は、もう誰も傷つけたくない」
口をほとんど動かさずに、ポツリと言う。

背を向けているため、湖華達がどんな表情をしているか分からない。
春にしては冷たい一陣の風が舞った。

廊下には那雲の足音しかない。

生徒達はみな、全校集会とやらで体育館に移動したためだ。

チツ、と忌々しげに舌打ちをする。
所詮、自分は化け物だ。

誰かを傷つけてしまいうくらいなら、断ち切ってしまった方がいいに
決まっている。

あの人達は、自分と同じ超能力者だと言った。
だが、根本的な何かがずれていたのだ。

あの人達には『光』がある。

闇の中でしか生きてこなかった自分にはない『光』が。
闇の住人は、光の世界では生きられない。

唇を噛み締めて歩いていた那雲だったが、そこで肩に軽い衝撃が走る。

ぶつかった、と分かるまでそう時間はかからなかった。

「あ…っ、ゴメンね」

慌てて顔を上げたのは、一人の女子だった。

茶色いボブが印象的な、活発そうな女子だ。

特に謝るうともせずに通り過ぎた那雲だったが、女子生徒の上に羽織っているパーカーを掴まれる。

「ね、ねえ…」

「ああ？」

忌々しげに女子生徒を睨みつけたが、相手は怯まない。

「私、人を探してるんだけど知らないかな？」

「…んなモン俺が知る訳ねえだろ」

パーカーを掴む指を振り払うと、再び歩みを進めた。

だが、那雲の行動は一時停止させられることになる。
何故なら。

「その人、涼原那雲っていうんだけど…」

ピタリ、と両足の動きを止める。ゆっくりと振り返った。

「ああ？てめえ、俺に何の用だ」

すると、女子生徒は嬉しそくに顔を輝かせる。

「じゃああなたが涼原くん？」

本当に、嬉しそうな顔で。

『超能力者、涼原那雲発見。至急捕獲、及び「南鶴城ヶ丘総合病院」への強制連行開始』

そう言った。

「!？」

那雲は目を見開く。

さらに女子生徒は、着ているセーラー服の胸元を開けた。
そこにあつたモノは、人間の白い肌ではなかった。

何か得体の知れない機械のようなものが埋め込まれており、不気味な機械音を鳴らしていた。

さらに、腕の中はカラッポで、ジャコツ！という音とともにそこから細いアームが伸びる。

女子生徒の顔は、いつのまにか豹変していた。

瞳はまるでビー球が埋め込まれたようになっており、一度も瞬きをしない。

唇は硬く結んであり、明らかに人間の感情というものがなかった。

そう、まるで機械のように。

『アンドロイド機械人間試作品一号、はやみねさほ早峰沙帆超能力者を発見。即時攻撃を開始、連衡します』

叫ぼうとしたが、声が出ない。

喉の奥はカラカラだった。

とにかく分かった事は、逃げなければ死ぬということだけだった。

震える両足を何とか動かし、回避行動に出る。

那雲は後ろを振り返らず、全力で走った。

一階へとつながる階段をほとんど転がるように下りる。

呼吸はメチャクチャだった。

吐く息はかなり荒く、肺がおかしくなってるんじゃないかと思うほど呼吸が乱れている。

あの変な女がこちらに来るのも時間の問題だ。

特に何も考えず、那雲は2・3と書かれた教室のドアを開ける。

教室の中は、全校集会で生徒が移動してしまったため誰もいない。とにかくどこか隠れられる場所が欲しかった。

ずるずると床にへたり込む。

「ち…つくしよう…ッ！！何なんだよ、アレは…っ！！」

あの女が口にした言葉をもう一度頭の中で再生する。

『超能力者、涼原那雲発見。至急捕獲、及び「南鶴城ヶ丘総合病院」

への強制連行開始』

『アンドロイド機械人間試作品一号、はやみねさほ早峰沙帆超能力者を発見。即時攻撃を開始、

連衡します』

そこから重要だと思っワード言葉だけを抜き出してみる。

超能力者。

涼原那雲。

捕獲。

南鶴城ヶ丘総合病院。

強制連行。

アンドロイド機械人間。

はやみねさほ早峰沙帆。

攻撃。

頭の中で、それらの言葉を組み立て、事実を浮き彫りにする。

自身を持つては言えないが「南鶴城ヶ丘総合病院」とは那雲の生まれた病院名のはずだ。

（…つまり、あの女はアンドロイド機械人間で、俺が生まれた病院からの命令で自分を捕獲するために学校に潜り込んでいたのか…ッ！？）

つまり、相手の狙いは自分一人。

（どうなってるんだ…病院側が俺を調べたいのは分かるが機械人間！
？そんなモノを造って何をやろうとしてる…）

実を言えば、那雲は過去にもその超能力のせいで『病院で検査を受けた方がいい』と幾度も言われた。

だが、今回は明らかに何かがおかしい。

例えば機械人間

自分一人を捕獲するただけに、あんな機械人間を造った？

いや、違う。

もしくは。

『私のような、機械人間達のためにあなたは造られた』

かなりの近距離で上がる声。

「ッ！？」

那雲が体をひねって立ち上がると、機械人間のアームから閃光が
迸ったのはほぼ同時だった。

ドガッ！！と今まで遮蔽物の役割を果たしていた机がなぎ払われる。
莫大な閃光が視界を覆った。

（やばい…ッ！！）

とっさの判断で横に転がる。教室から廊下へと出たようだ。
機械人間が、こちらを振り向いた。

その感情のない瞳を向けて。

『涼原那雲が攻撃を回避。第二段階に移ります』

吐き出される機械のような声。

突如、機械人間の腕が変形した。

アームのようなものの先端に、あらたにバズーカのようなものが接
続される。

それを、こちらに向けて。

ドガガガガガガガッ！と、一際大きい轟音が爆発した。その光の玉のようなものをまともにくらった那雲が、廊下に面した窓に叩きつけられる。

ガッシャアアン！という音とともに、ガラスが砕け散った。

宙へと投げ出される那雲。

「あ…がつ！？」

肩の辺りに激痛が走った。見るとガラスの破片が数本突き刺さっている。

鮮血が舞う。

もう、那雲には落ちているという感覚はなかった。

口の中を伝う鉄くさい味と、焦点が合わなくなる視界。

高さ約十五メートル。

そんな所から生身の人間が放り出されたらどうなるか。

小学生にでも分かることだ。

幸い、下は校庭なので固いアスファルトではないが、そんなのは関係ない。

覚悟して、目を閉じる。

だが、思った感覚はいつまで経ってもやって来なかった。

（何…が？）

おそろおそろ目を開けて、気付いた。

浮いている。

「は…？」

自分の体が、地上から約五メートルくらいの所で宙に浮いていた。それだけではない。フワフワとした無重力感がある。

（まさか、体が軽くなったとでもいうのかよ…？）
そして、那雲は気付く。

先ほどまで会っていた、物体の重さを変えられる超能力者の名前は
何だっけ？

「ホンマ危なかったわ。ウチが来るのがあと数秒遅れてたら、アン
タぐしゃぐしゃやで？」

「…！」

落下地点だった校庭に現れたのは、分子操作の異名を持つ秋ノ宮湖
華と。

「誰が瞬間移動でここまで運んでやったと思ってるんです？大体、
湖華の足じゃ間に合いませんよ」

まるで女神のような美貌を持った、瞬間移動能力者の三苑影也だっ
た。

「な…っ！お前ら…ッ！？」

瞬間、急激に体の重さが元に戻った。

高さ五メートルから落とされても結構痛い。

土をはらって、那雲は立ち上がった。目の前の超能力者二人を見る。
影也が面倒くさそうにこう言った。

「さあて、では鬱陶しいあの機械女をおっぱらうとしますか」

その視線の先にはいつの間校庭に下りたのか、先ほど那雲を撃破
した機械人間アントロイドが立っていた。

『敵性有りと判断。三苑影也、秋ノ宮湖華を速やかに排除します』
言っと、ガシヤッ！！と腕に取り付けたバズーカのようなものをこ
ちらに向ける。

だが。

「遅いよ」

影也が瞬間移動を使って一足早く機械人間の背後に回り込んでいた。

「……？」

機械人間が何かに気付く前に、頭上に机が現れた。その小さな頭をかち割るために。

「……！！」

辺りに粉塵が舞う。

「さっきこっちに来る時一緒に送つていたんですよ。机といっても湖華の力で300キロくらいの重さがありますけどね」

「……ッ！！」

初めて機械人間が回避行動をとった。さらに二人はその隙を見逃さない。

湖華は近くに落ちていた植木鉢を掴むと、機械人間に向けて投げつける。

ただの植木鉢ではない。およそ500キログラムまで重さを増したものだ。

そんなものが体に直撃すれば、骨の一本や二本は確実に持つてかれる。

ベコン！！と何かがへこむような音が響き渡った。

「……人体の損傷を確認。即時に研究所への撤退を開始」

ガシャン、と不気味な音を立ててアームを戻す機械人間の腹に、植木鉢がめり込んでいた。

血は一滴も垂れておらず、傷口からはパソコンの中に入っている精密機械のようなものが見える。

そして、機械人間は消えた。

まるで影也の瞬間移動のように、その場から一瞬で。

3、機械人間Ⅱアンドロイド（後書き）

キャラクター紹介3

●秋ノ宮湖華

栗毛色のカールした髪に、頭に特大リボンというトンデモお嬢様^{ガール}。成績優秀で、二年の中では頭の良さはダントツトップ。

だが関西弁でかなり口が悪く、性格也大雑把なめんどくさがりや。見た目と性格に大分ギャップのある少女。

実は京都にある八つ橋会社社長令嬢でかなりのお金持ち。

姉が一人いるが、こちらはいたって普通の人。

背が低いのをかなり気にしており、自分のことをチビと言う相手は初対面だろうが容赦なく殴り飛ばす。だが、女子には優しい模様。

異能力研究部の部長で、物体の重さを変えることができる、通称『分子操作』

4、拘束されていた手錠を外す

機械人間アンドロイドが消えた後も、那雲はしばらくの間そこから動けなかった。

粉塵が舞う広い校庭の真ん中で。

やがて、何かの糸が切れたかのようにその場にへたり込む。

「……ッ」

どうやら先ほど刺さったガラスの破片が再び痛み出したらしい。

そんな那雲の横顔を見て、傍にいた影也がそっとハンカチを差し出した。

「どうぞ。そのままでは傷が悪化してしまいますよ」

「……」

しばらくその黒いハンカチを凝視していたが、何かを思い出したかのように顔を背ける。

「いい。お前らに助けられても迷惑だ」

激痛が走る左腕の傷口を抑えて無理やり立ち上がる。

影也はしばらく沈黙した後、ハンカチを申し訳なさそうにポケットにしまった。

那雲は歩き出す。

影也たちに背を向けたまま。

重たい足は上手く動かず、時々身体が傾いたが決して振り向かずに。ジャリ、と砂を踏みしめる音がやけに大きく感じた。

あの人達には頼れない。

昔と同じことを繰り返すだけだ。

なら、関わらない方がいいに決まっている。

「待ちや」

鈴のなるような声の関西弁が響いた。

那雲は一瞬だけ歩みを止める。だが、再び土を踏もうと歩を進めた時だった。

「待ちやゆつてんのが聞こえんのか！？止まれ！！」

先ほどとは比べものにならないくらいの大喝が飛んだ。
驚いて振り返る。

視線の先に立っていたのは、険しい顔つきをした少女。

自分とは無縁の世界、どこかのお姫様のような可愛らしい容姿を持つ少女だ。

その少女が、唇をギュツと噛みしめて怒りの面おもてでこちらを睨みつけている。

「……アンタは、自分を何やと思つとる」

那雲は、ただ黙る。

「今までずっと独りだったんやろ！？誰とも会話できずに！！」

「……」

「そんなの寂しいに決まつとる！！そんなんは間違つてんや！！」

「……るせえよ」

自分の何が分かるというのだ。光の世界の住人のくせに、偉そうに物をいうな。

「ウチがアンタを助ける！同じ境遇の人間を見捨てられると」

「うるせえって言つてんだ！！何が同じ境遇だ！！何も知らない癖に、俺にかまうんじゃねえ！！」

「ッ……！！」

途端、パンと頬を張られた。

湖華が、手を振り上げた格好のまま震えている。

「……ウチも、両親がおらん」

ぼつりと、紡がれる言葉。那雲は息を飲む。

「けど、寂しくてどうしようもなかったウチを、今の秋ノ宮家が救ってくれた。名前のなかったウチに『湖華』ゆう名をくれたんや」

湖華は、キツと顔を上げた。

「くれたんは名前だけじゃない！独りぼっちだったウチを引きずり出してくれて『希望』をくれたんや！！」

那雲は、小さな少女の話を黙って聞いていた。

「アンタも、変わりたいんやろ！？ホントは、こんな生活はもう嫌なんやろ！？」

「……俺、は……」

「何で自分を信じへんの！アンタは、自分で闇を作り出しているだけや！本当に怖いのは自分自身やろ！？」

「……」

「誰も傷つけない？アホかアンタは！！アンタのその力はな……傷つけることしかできるのか！？その力を使って誰かを救うことはできるのか！？」

「救……う……？」

「そうや！その力をどう使うかはアンタが決めるモンやろ！！それによってアンタは、光にも闇にもなれる！！それが分からののか！？」

「——！！」

呼吸が止まる。

湖華是那雲の羽織っているパーカーを掴んだ。

「アンタは、化け物なんかじゃないんや！！」

ドン、と胸の辺りに来る強い衝撃。

ずっと、蔑まれていた。自分は、この世界の害になるものだと思っ
り思っていた。

幼い子供は、何度も命を絶とうとしたこともあった。

ずっとずっとずっと。

誰かに、自分を見てほしかった。

認めてほしかったのだ。

一人の人間として。

『涼原那雲』として。

「……ッ!」

目を見開く。

身体の奥深くから込み上げる熱い思いを抑えられない。

強く握りしめていた拳が、震える。

湖華の声が響いた。先ほどとは違う、母親が子供をあやすときのよ
うな優しい声で。

「……異能力研究部に、入ってくれんか？」

伏せていた顔を上げる。

風が吹き、目を覆っていたパーカーが靡いた。

澄んだ瞳で、目の前に立っている影也と湖華を見つめる。

漆黒の黒髪が広がった。

「……ああ」

「……で、何なんだココは」

感動の（？）湖華の説得から30分後。

那雲、湖華の二人が立っているのは、ある教室の扉の前。

そこには、でかでかとした板に毛筆で『金持ち部』と書いてあった。
湖華は不思議そうな顔で答える。

「だから異能力研究部の部室やけど」

「そうじゃねえよ！んだよこの『金持ち部』って！！」

「那雲はホントドあほやな」

小馬鹿にしたように口角を吊り上げ笑う湖華。つつか初対面でドあ
ほとか言うな。

「普通に『異能力研究部』って名乗ったら怪しいやろ？だからこう
して名前を偽ってんや」

「どっちにしる怪しさ全開だろ！！」

「ちなみにこの部の入部条件は表向き『親の年収が八千万以上』に
なつとる。これなら余計な一般人も入れないやろ」

「当たり前だ！！八千万でどこのブルジョウだよ！！」

と、早くもコントを繰り広げる二人のもとに「すみません、遅れま
した」と駆け寄ってきたのは影也だった。

何でも先ほど引き起こした騒動の説明を、先生および校長にしていたらしい。

全校集会から戻って来た生徒と教師は、全壊した二階廊下を見て唖然だったそうだ。（無理もない）

そこで影也は『我々金持ち部が少々派手な実験をしてしまいました。え？ああ、修繕費はすべてこちらで受け持ちますからご心配なさらず。そのための金持ち部ですから』

とニッコリスマイルで言ったらしい。

どこの学校に自分で謎の実験をして学校を壊し、修繕費は自分で払うというトンデモナイ生徒がいるというのだ。

「いやゝ今回は中々安上がりで済みました。しめて【一部音声を乱しております】円ですね」

「なんや結構安いな」

「って待て！！それ車二台は余裕だから！！というか毎回こんなことがあんのか！？」

「結構来ますよゝ彼女は。アンドロイド概ね私達の超能力を何かに利用したいんでしょう」

女神のような美貌でアブナイことをサラリと言う影也。

「まあここではなんですのでお話は室内で」

苦笑しつつ、影也は金持ち部の部室のドアを開けた。

その先に広がっていた世界は――

「…は？」

思わず絶句して声を漏らしてしまう那雲。

ポカンとしている彼をよそに、二人はさっさと室内に入ってしまった。

「どした？早く入り」

湖華に促されて恐る恐る踏みしめたのは、真っ白な羊毛のカーペッ

ト。

さらに部屋の中央には、会社の社長室に置いてありそうな感じの巨大なソファアが二つ。

ソファアの前には、ガラスでできた透き通る長机が設置され、バラの花が小さい花瓶にいけてある。

その他にも天井からぶら下がるシャンデリア、煌めく彫刻が刻まれた本棚と食器棚。部屋の隅には明らかシルクであろう毛布に包まれているベッド。

（こりゃあ学校側も引くだろうな…というか八つ橋会社ってそんなに儲かるのか…？）

校内とは思えないほどの眩しい空間がそこにはあった。

「ん〜っ、何か疲れたわ」

早くも王家の人間が使いそうなベッドに寝転がる湖華。

「あ、今お茶をお出ししますね」

手慣れた手つきで細かい装飾の彫られた食器棚を開ける影也。

（つつか勢いで入っちゃったけど、俺別の意味でやっていけるのか…？）

那雲の心の叫びは、切実だった。

4、拘束されていた手錠を外す（後書き）

キャラクター紹介4

●早峰沙帆
アンドロイド
機械人間の少女。

那雲たちが生まれた病院の中で、密かに造られた。

元は人間だったらしい。

アンドロイド
なぜ機械人間になってしまったかは不明。

何のために造られたかも不明。

いつか明らかになる…かも。

髪形は茶色のボブで、活発そうな顔立ちをしている。

銃器やバズーカ、マシンガンなどの機能が体内に埋め込まれている。

5、まずは温かいお茶でもいかがですか？（前書き）

前回の話から、唐突にコメディーに突入しました↑？

シリアスなのか、コメディーなのかイマイチ判別しづらいこの物語。
多分それはその時の私の気分によって変わります。

5、まずは温かいお茶でもいかがですか？

「どうぞ」

目の前に出されたのは、なにやら周りの景色と若干かみ合っていない抹茶だった。

影也が点^たてたのだろうか。深緑色の茶からは新緑の香りが漂う。

「さ、さんきゅー…」

茶碗を手にとって口をつけると、ふんわりとした柔らかな味が口の中を満たした。

那雲の向かいのソファーに座った影也が艶麗な微笑を浮かべる。

…コイツ、本当に男だろうか。

「那雲さん、僕を見つめたって何もあげませんよ」

「な…ッ！べ、別にそんなじゃねえ！！」

危うく茶を吹きかけた那雲を見て、湖華はやれやれというように首をすくめた。

「影也に夢中になるんはええけど、コレも食べてくれへんかな」

「ゲホ…ッ、だ、だから違うつつの…って何だコレ…」

那雲はテーブルの隅に置かれた、小皿に入った食べ物を凝視する。

奇妙な物だった。ふにやふにやとした皮のようなソレは、三角形の形をしている。

「何だコレ…」

不思議そうに小皿を覗き込む那雲に、湖華が目を丸くした。

「はあ！？那雲八つ橋知らんの？」

「は、コレがそうなのか？」

『八つ橋』という単語は知っているものの、あまりアウトドア派ではない那雲は、八つ橋というものを見たことがなかった。

ましてやコレは西日本ぐらいでしかお目にかかれない。

「まあ食うてみ、秋ノ宮家の自慢品や」

湖華に促され、おそろおそろ黄な粉のかかった八つ橋を口に放り込む。

眉間に皺をよせて食べる那雲の顔色を、影也と湖華が見守る。

これはただの八つ橋ではない。湖華の会社で作られた高級品だった。使われている材料から出来上がるまでの過程まで、普通の倍近くお金がかかっている。

一般市民はまず口にできない。

そんな八つ橋を一口でたいらげた那雲の感想は――

「……まじい」

プチッ！と、何かが切れるような音が部屋に響き渡った。

すぐにそれは『ゴゴゴゴ……』という不のオーラへと変化していく。

「……アンタ、もういつペン言うてみ……」

ひょえっ、と影也が飛び上がったが、那雲はその気配に気付かない手に付着した黄な粉を舐め取りながら、

「あんまうまくねーぞコレ……八つ橋ってこんな」

「アンタの舌は節穴かゴルアアア……」

ドゴッ！、という低い音が炸裂した。一陣の風が走る。

那雲は驚いて背後を振り返った。

「は……」

頬のわずか二？先の壁に、茶碗がめり込んでいた。

パラ……と周囲の壁が崩れて行く。かなり深くまで埋まっているのか、なにやらシューシューというとてもマズイ音が聞こえた。

分子操作。

急激に重さを増した茶碗が、那雲に向かって投げられたのだ。

「あ、の……こはな……？」

「アンツタ何呑気に寝てんやゴルアアア!!」

「早く起きないと瞬間移動レポートで砂場に埋まらせますよ」

二人から容赦なく背中を踏みつけられ、暴行を受ける那雲。

哀れな子羊は、強引に意識を取り戻せさせられた。

「…ツたた…お…前らな…」

頭を押さえて立ち上がると何ともム力つくことに、那雲をボコした本人達は何とか全壊を免れたソファ―に座って茶を飲んでいた。

「おや、どうかしましたか」

「何やボロボロやな」

お前らのせいだよ、と絶叫したい那雲だったがまたボコられるのは御免なので黙る。

「つつかお前ら暴れすぎだろ…」

ポソリと呟いて瓦礫があちこちに散乱している部屋を見渡した。

「那雲が弱いんや」

「そうですね普通

に突っ立ってたら死にますよ」

「だからなんで暴れること前提なんだよ!!」

グシャグシャと頭を？き回す那雲をよそに、湖華が不思議そうな顔をした。

「そついやあ…那雲の持つてる力って何や？影也、知つとるか？」

「いいえ…僕は那雲さんの誕生日を見て超能力者と判断したただけなので…」

興味しんしんの目線が注がれ、那雲は面倒くさそうに答えた。

「俺も詳しいことは分かんねえけど…多分、風系じゃねえか？」

「風系？」

分からないというように首をひねる二人。

「じゃあ試しになんか力使ってみてや」

促され、那雲はしぶしぶ立ち上がった。

実をいうと、彼はまだ力の発動のさせ方がよく分かっていない。昔は、カッとなると何人かを吹き飛ばしたりしたが、意識していなくてもよくそれに似た現象が起こる。

困り顔を見ると、影也がそれを察したのかアトバイスをくれた。

「力というのは、なるべくリラックスした方が制御も簡単にできますよ。無理に力を入れると暴走してしまいます」

無言で頷くと、両手を前に翳してみる。

リラックス。

集中。

指先に力を送るように。

目を閉じる。

ジワジワと、力を貯めて。

そして、目を開く。

刹那。

ゴオオオッ！という何やら破壊力抜群の擬音とともに暴風が駆ける。

那雲は見てしまった。

突然吹き荒れた風のせいで、湖華のフリル付きのスカートが大きくめくれ上がったのを。

その中に履いている、ピンク色の可愛い布も――

「……………」

湖華は無言で立ち上がった。

その丸い瞳には、何かとてもアブナイ光が宿っており、こちらを真っ直ぐ見つめている。

彼女は笑顔だった。

とても可愛い笑顔が浮かべて。

「そうかそれがアンタの超能力かあああああああ！！」

「ぎゃああああああああああああつ!!」

バギッ!と何かが碎ける音が炸裂した。

いち早く部室の外へと瞬間移動して被害を逃れた影也は溜息をつく。

「今学期最初の異能力研究部の活動は、那雲さんの力を安定させることから始めましょうか…」

6、一夜明けて

「えゝみんなも知っている通り、中学では二次方程式を習ったな」
最悪だ。

なぜ噂というものはこうも早く広まってしまうのだろうか。
そもそも不思議に思う。一体噂の出所というのは何処なのだろう。

「今日からの数学では、この二次方程式を応用させたものを習う」
入学から二日目。

今日から早々と授業が始まっていた。
いや、それ自体は別に構わないのだが、問題はもう一つ。

「では、さっそく教科書の四ページを開いてもらおうか」

那雲が『金持ち部』に入部したことが早くも広まってしまったのだ。
そもそも、この学校では『金持ち部』[〃]『選ばれたセレブ中のセレブしか入部することができない』

という方程式が成り立ってしまっているらしい。

そんな所に入部してしまった那雲は全学年の中でも有名人になってしまった。

無理もないだろう。

湖華は中身はアレだけど一応社長令嬢の美少女だし、影也は女神のような美貌を持つ礼儀正しい（裏は超腹黒だが）好青年。

そんなセレブオーラ全開の面子メンツの中で那雲はというと…

無造作に腰の辺りまでのばした黒髪。学ランの代わりに羽織った校則違反のパーカー。くるぶしが見える程度にだらしなく上げたズボン。ベルトに付けた金属の飾。

ハッキリ言って、そこらの路地裏にたむろしてそんな恰好でセレブとは程遠い。

たとえるなら、羽を広げた孔雀のなかに一匹だけカラスが混ざっているようなものだ。

そんな那雲が『金持ち部』に入部すれば当然周りの注目も集まる訳で。

（クソ…失敗した…ッ！なるべく目立たずに高校生活を送るはずが三日目で台無しじゃねえか！！）

だがそもそも『金持ち部』とは正しい姿ではない。

その実態は『異能力研究部』超能力者だけが集まる部活だ。

この町の『南鶴城ヶ丘総合病院』で行われた『ある実験』によって生まれてしまった超能力者達の居場所。

『ある実験』が行われたのは、今から15～16年前の9月18日。つまり、超能力者として疑われるのは『15か16歳の子供』。『誕生日が9月18日』。『南鶴城ヶ丘総合病院で生まれた』。というこの三条件をクリアしている者だ。

そして、那雲はそれに見事に当てはまる。

それを影也に見破られ、異能力研究部に入部させられ現在にいたる。

（つつか入学二日目から色々ありすぎだろ…アンドロイド機械人間とかアンドロイド機械人間とか）

アンドロイド機械人間とは、昨日那雲を襲ってきた少女のことだ。たしか名前を『早峰沙帆』といったか。

（アイツは一体何だったんだ？）

色々と事が起こりすぎて忘れてしまっていたが、結構大きな問題である。

（影也達は正体を知ってんのか…？）

アイツはあの病院で造られたのだろうか。

だとすればあの病院は何を考えているのだろう。

自分達のような超能力者を造り、あまつにあんなモノまで。

目的が見えて来な――

「涼原くんっ!!」

「は!?!」

いつのまにか目の前に立っていた先生の大声で、意識を取り戻した
那雲。

頭が白く、やや横幅が広い先生に睨まれ那雲はしぶしぶ教科書を出した。

「丁度いい。前に出て黒板の問題を解きなさい」

白いチョークをつかんだ手がにゅっと伸びてきて、那雲は思わず口に出してしまう。

「……わざわざ俺にやらせなくてもめえでやればいいだろ」

「なっ……! てめえとは何だね!! 口を慎め!! 私はこちら見えてもこの道三十年のキャリア……」

「三十年前はその頭もふさふさだったのか?」

興味なさそうに言い返すと、クラスで嘲笑が起きた。

「……ぐぐ……っ! もういい!! 君はそこで大人しくしてなさい!!」

悔しそうに足音を立てて教卓に戻って行く先生を見て溜息をつく、再び窓の外に意識をやった。

授業終了のチャイムに促され、生徒たちは『起立、礼』というお決まりの挨拶をした。

那雲は再び机に手を投げ出すと、何だか周りが騒がしい。顔を上げると、女子生徒数人が那雲を覗き込んでいた。

「那雲くんって怖い人だと思ってたけど違うんだね〜！」

「ホント、見た？さっきの先生の悔しそうな顔！」

「ざまあ見るってカンジ！マジでうけた〜」

嬉しそうにはしゃぐ女子生徒達を見て、那雲はうつとおしそうに吐き捨てる。

「…俺はアイツが気に入らなかったから事実を言っただけだ」

「でもすごいよ〜あの先生、何かオーラがすごくてさ、みんな緊張しちゃってたのに」

「…確かに頭はすごかったけどな」

女子生徒が笑い出す。何故か知らないが、不思議な気分だった。今まで、誰にも話しかけてもらえなかったから。

じゃあね、と軽く手を振ると女子生徒たちはほかのグループの輪に戻って行った。

そこで話される会話は嫌でも耳に入ってしまう。

「那雲くんって案外カッコ良くない？」

「だよ〜最初は怖い人だっと思って思い込んでたけど」

「黒い長髪とか、すごいサラサラしてそう！」

「よく見たら結構イケメンだしさ〜」

ふう、と息を吐く。

女というものはどうも疲れる。

だが、悪くはなかった。

久しぶりに誰かと会話ができたから。

そこで、またしても那雲の意識が中断させられる出来事が起こった。

「よお、お前さつき女子たちと何話してたんだよ？」

あ？と視線を向けると一人の男子生徒がにやにやしながら机に手を置いていた。

茶色っぽい髪を肩まで伸ばしたサッカーボールが似合いそうな爽やか系男子だ。

一言。

「消えろ」

「初対面でそれはないだろう？というか女子には優しいのにオレには消えろって…もしかしてお前見かけによらず女好き？」

「殺す」

「何かイラツキ度アップしてる？まあいいや…オレは山川^{やまかわ}海風^{うみかぜ}。お前は？」

「山、川、海、風…？冗談はよせ。殺すぞ」

「よく言われるけど本名だ！！それにオレはお前の名前を聞いたの！！」

「じゃあ春夏秋冬」

「じゃあつて何！！オマエこそ殺すぞ！！」

辺りからクスクスと笑いが漏れていることに気付く。また騒がれるのは面倒なのでキツパリと言い放った。

「涼原那雲」

「お、今度はちゃんと言ったな。それにしてもお前だって涼しい原っぱに雲…あんま変わんねえな」

「死ね」

「だから何でさつきからそればっか——！！？」

本当に鬱陶しい。会話するだけで疲れる。
入学したてから道を誤ってしまったか。
本当に鬱陶しい。

本当に…

放課後。

生徒達はおのおの自分が選んだ部活に行っているようだ。

那雲は最後まで教室に残っていた。

はたしてあの部活に行くべきか。

立ち上がって教室を出ると、廊下を歩く。

那雲たち一年生の教室は一階。それに対してあのトンデモゴージャスな金持ち部の部室は三階。

階段を上るのがとても面倒くさい。

それに那雲は昨日の出来事を思い出して冷や汗がにじんだ。

また湖華からの暴行、および影也からの超毒舌を受けなければいけないのか。

廊下を悩みながら歩いていると、通りかかった女子に何故か「頑張つて！」と手を振られる始末。本当に別の意味で頑張れ自分。ついに上に上がる階段の目の前に来てしまい、那雲は決心する。

うん、帰ろう。

やはりあの虐待を受けるのは死んでも御免だ。
危ない橋は渡らないに限る。

と、クルリと踵を返すと――

「どうかしましたか？ 那雲さん」
「……………」

美女、女神。

彼を現す言葉はいくつかある。

学ランをぴっちり来て柔らかい微笑を浮かべる男。

その笑顔を見ただけで恋に落ちてしまいそうな程だ。

だが、今の那雲にはそれが悪魔の微笑みにしか見えなかった。

「おま…まさか、瞬間移動して…ッ!?」
テレポート

「やだな〜那雲さんたら 何してるんですかあ〜ホラ、僕らの部室
はこの階段を上らなきゃいけないんですよ〜」

「ま、まて…早まるな…」

「もお〜駄目じゃないですか さあ、一緒に行きますよ〜」

ガシ、と細くて白い指でパーカーを掴まれる。

「地獄まで…」

「ぎゃあああああああああああああ!!!」

直後、瞬間移動テレポートによって二人は三階の部室に移動する…

ヒュン、と軽い音とともに那雲は部室のソファアの上に着地した。
相変わらず、湖華は優雅に茶を飲んでいるようだ。

「何や遅いな〜」

コトリと茶碗を置く。やはり飲んでいたのは抹茶だったのか。

「な、何の用だ…」

完全に猫の前に出された鼠のように怯えている那雲。

湖華は立ち上がると食器棚からお盆を取り出した。

その上に乗ってるのは…

「これウチの家の新作『ウインナー八つ橋』ゆうんやけど…」

「待て待て待て待て待て待て！！明らか名前からしてマズいだろ！

！」

「何ゆうてんの、ちよつと食べてみ」

「神様ああああああああああ」

隣で苦笑する影也が何とも憎たらしい。

「大丈夫ですよ 頑張つて、那雲くん」

「ウツゼエエエエエエエエエ！！」

「ちよい待ち、何ゆうてんの影也。アンタの分もあるんやけど」

「……………え？」

時間が止まった。

キヨロキヨロと周りを見渡してる間にも、影也の分の八つ橋が用意される。

「ほい」

「いやいやいやいやいや湖華、ほいじゃなくて…」

ダラダラと汗を流す女神さま。那雲はヘン、と鼻で笑ったがそれどころではない。

目の前に置かれた赤なのか茶色なのか分からない色をしている八つ橋。

断ったら、どうなるか…

急に寒気がしてきた那雲はこっそりと影也に耳打ちする。

（な、なあ…コレは食べるしかねえのか…？）

（ですね。断れば命はまずないでしょう）

（そ、それはどのぐらいの確立で…）

（99.9パーセント）

「ほぼすべてじゃねえかあああああああ！！」

「おい、那雲うつさいぞ！さつさと食べんかい！！影也も！」

「は、はiiiiiiiiっ！」

やめてくれ。そんな可愛らしい丸い瞳で見つめないで。

二人は決意する。震える手で八つ橋を掴んだ。

目を閉じる。

そして、背水の陣の思いで口に放り込む！！

無言。

無言。

そして、反応は遅れてやって来る。

（まっじii！！）

（ヤバイですうううううううううううううううう！！）

心の中で大絶叫し、喉を掻き毟る二人。

そんな目の前の光景を見て、湖華は首を傾げた。

「なんやどうしたの…もしかして、うまくなかった？」

渾身の思いで湖華の方を振り返ると、親指を突き立てる。

「これやべえよ！！す…すごいめえ…！！！」

（別の意味でやべえよ！！別の意味ですげえよ！！）

「ほ、ほんとです…こ、こんな美味しいもの、は、初めて食べまし

た…！」

（この状況でこれだけお世辞を並べられる自分に感服しますよ）

明らかに声が震えて悶えている二人だが、湖華はとても嬉しそうに

目を輝かせた。

「ホント！？これ今度商品化するねん！ごつつ売れるとええな」

（ごつつ死者がでるわボケエエエエエ！！つか商品化はやめろおお！！）

全国の皆さん、もしも『ウインナー八つ橋』というのが売っていても興味本位で買っただけじゃいけません。

「あ、じゃあコレ食べたらさっそく超能力の練習しよ！那雲も初めてだと思っしな！」

湖華の声は二人に届いていない。

見事にソファーに倒れた二人は気絶していた。

…こんな調子で大丈夫なのか。

6、一夜明けて（後書き）

……という訳で次回は超能力の練習をするそうです。
きつとバンバン力使ってる（ハズ）だから、超能力が好きな読者様
はお楽しみに〜
…

7、攻撃性と防御性が戦つとどちらが勝つのか（前書き）

昨日の九月十八日は那雲達の誕生日でした。

一日遅れてゴメンナサイの山吹琴巴です。

更新ペースがだんだんと遅れていく…

7、攻撃性と防御性が戦うとどちらが勝つのか

その後、湖華の八つ橋によって死滅しかけた二人だったが、何とか復活した。

そして、今からやっと『異能力研究部』らしい超能力の練習なるものをするそうだ。

湖華はぴょんとソファーから立ち上がると、二人を見て言う。

「よし！じゃあいつもの練習場所いこー！」

まだダメージが残っている影也は引きつり笑いを浮かべた。

早くも回復した那雲は上機嫌の湖華に質問する。

「いつもの場所とは何処だ？他にも部室があるのか？」

歌うような気軽さで湖華は那雲の方を振り返った。

「んゝその場所事体はこの部活のものじゃないんやけどね、特別に借りれるようになってんや」

「まあ『金持ち部』ですからね。湖華が社長令嬢ということもあって基本何をしてても学校側は頭が上がらないんですよ」

腹を押さえながら説明する影也に納得する。学校側も哀れなことだ。

と、そこで湖華は何かを思い出したような顔になると口を開く。

「そや、那雲その練習場所の鍵借りに職員室行ってくれへん？」

「何で俺が…？つかどこなんだよ、その練習場所は」

「今は使われとらん旧・柔道部の部室や。お願い頼むわ」

那雲は心底面倒くさかったが、断れば何をされるか分からない。

しぶしぶ了解すると廊下に出るためにドアノブを握る。そこでふいに湖華に呼び止められた。

「あ、鍵借りる時にはこのカードを先生に見せや。そーすると簡単に鍵くれるで」

手渡されたカードには『金持ち部部長秋ノ宮湖華』と毛筆で書いて

あった。この学校の女王がコイツは。
だるそうにカードをパーカーのポケットに入れるとドアを閉める。
部屋には影也と湖華だけが残された。
那雲が去っていく足音を聞きながら、影也が溜息をつく。
その場の空気が変わった。

「…で、本題は何です？湖華」

ソファーにもたれかかりながら訪ねる影也に、微笑を浮かべる。

「さすがやなあ、分かってたんか」

「どう考えても不審すぎます。貴女が那雲君一人に鍵当番を任せる訳がありません」

「隙のない男やなあ、アンタは」

コロコロと笑う湖華は、影也の向かい側のソファーに腰を下ろした。
頬杖をつきながら言葉を紡ぐ。

「…例の機械人間、アンタどう思う？」
アントロイド

「今回は明らかに行動がおかしいですね。特に不審な点が三つ」
影也はピツと三本指を立てた。

「一つ目は、襲うタイミングが早すぎる事。確かにこの時期は超能力も急発達しやすいですが」
アントロイド

「ウチとアンタが初めて機械人間に出くわしたのは一年の夏に入ってからやったもんなあ」

「そう。奴らは何かに焦っている」

影也は淡々と説明する。茶碗に残った抹茶が、頼りなさ気な湯気を
出していた。

「次に二つ目。前回見た時と格段にレベルが違う」

「…それはウチも気付いとる。前はあんなバズーカ砲なんてなかった。それに、動きも機敏すぎてたな」

「さらに那雲君に怪我を負わせた。貴重な研究サンプルなら、なるべく損傷を避けるはず」

静まり返る部室。運動場から響く生徒の声がやけに大きく聞こえる。

「最後に三つ目。奴らは、那雲君に異常な執着を持っている」

「……………」

目を細める湖華。

「僕らの時とは違って、何としてでも那雲君を手に入れたい感じが表に出ています」

「…と、いうことは那雲はウチらとは違って利用価値が大きいということか？」

「その可能性が高いです。奴らは那雲君を使って何かをしようとしている」

張りつめる空気を拭うように、湖華はダラリと力なく手足を投げ出した。

「……一体奴らは何なんや、何をしようとしとるんや」

聞いたところで答えられる質問ではなかったが、聞かずにはいられないのだろう。

「僕が聞きたいですよ……何かをしたいなら僕らを生まれてから今日まであの病院で拘束してればいい。何故わざわざこうやって野放しにして慌てて回収しに来るのか…」

「……『あの人』にも聞いてみたんやけど深い部分までは知らんゆうてたし…」

丁度その時、どんよりと重くなった室内の空気を打ち砕くようにドアが開いた。

「鍵ってこれでいいのか？何かすごい錆びついてるぞ」

那雲はジャラジャラと鍵を振り回しながら部屋に入る。空気が変わっていることにも気付かずに。

悩んでいてもしょうがない、というように二人は立ち上がった。那雲を誘導するように前に立つ。

「じゃあ練習場所に行きましょうか」

相変わらずの女神顔負けの微笑だったが、その笑顔が若干曇っていることに那雲は不思議そうに眉をひそめた。

二人に導かれるままにして到着した先は、校庭の隅にある古びた倉庫だった。

塗装は剥げているし、あちこちにシミまである始末である。遙か遠くから運動部の生徒達の黄色い声が聞こえてくるが、同じ校内にあるとは思えないほどここだけ次元が違っていた。

「……何か出そうな建物だな」

倉庫を見上げる那雲を見て、湖華がおどけたように笑った。

「なんや、那雲怖いんか？」

「ッ！別にそんなんじゃないやねえよ！！」

「照れてますね」

二人に馬鹿にされ、半分ヤケになった那雲は力ギを突っ込んでドアを開ける。

ギイイ…と低い音を立てて開いた扉から、黴くさい臭いが漂って来た。

中は完全なる闇である。扉を開けたため差し込んだ光によって、室内を舞う埃がハッキリと見えた。

鼻と口を手で覆いながらそばにあった電気のスイッチを押す。少し遅れて蛍光灯の明かりがついた。

「……お前ら、いつもここで練習してんのか？」

「慣れというのは怖いものですよ」

影也が笑いながら言う。

室内は八畳ほどの広さでお世辞にも立派とは言い難かった。

雨漏りのシミができた天井に、傷だらけの壁。

真ん中に体操マットが置いてあるくらいで他には何も無い殺風景な部屋だ。

「では、始めましょうか湖華」

那雲に『見ている』というように促すと、影也は部屋の真ん中に立った。

湖華がそれを確認すると何かを構える。それは――

「拳銃!？」

黒くて重そうな物体を影也に向ける。

「安心しや、ただのビービー弾や」

言ったとたん、パンパンパン!!と乾いた音が連発した。

咄然とする那雲をよそに、影也は連射された玉を器用によけていく。現れては消え、現れては消え、玉の間を正確にぬうように瞬間移動テレポートを繰り返す。

「ま、ざつとこんなもんです」

銃声がやみ、影也が肩をすくめた。

湖華がこちらを振り返って言う。

「さあ、次は那雲の番やで」

「……………」

いや、それ絶対死亡フラグだから。という言葉を読み込み、部屋の真ん中に立つ。

すぐさま湖華の銃口が向けられた。

黒い穴が、自分を狙う。

(……………いくらビービー弾だからと言ってもあたるとかなり痛いよな……しかも近距離すぎねえか?)

「おい、何ブツブツ言ってるや!始めるで!」

「はい……」

諦めた那雲は抵抗をやめ、大人しくすることにした。

影也が慰めるかのように説明する。

「この練習は、機械人間アンドロイドなどに襲われた時を想定した訓練です。あ

くまでリラックスしてください」

「どこに襲われる時にリラックスしてる奴がいるんだよ！！想定からして違うだろ！！」

「今から発射される弾に一発でも当たらないようにしてください。もちろん、超能力を使って」

「俺の言ったことはスルーかよ！！」

那雲のツツコミも虚しく、銃口がこちらを狙う。パン！！という音とともに右に体をずらした。

「ちょ、始まんのはや…ッ！？」

だが、湖華の勢いは止まらない。相手を正確に打ち抜くため、那雲の行動を先読みして狙ってくる。

ズポンを何発もの銃弾が走った。「那雲君！超能力使って！」という影也の声が遠くに聞こえる。

必死に風を操作して小さな突風を起こすが、そんなことは無意味に終わる。

もう何発の銃弾が自分の体に当たったかも分からない。湖華が銃口を下ろした時にはすでに虫の息だった。

「……アンタ、この銃本物やったら死んどるで」

「……んな…こと…言われても…」

息切れを繰り返す那雲に影也はアトバイスする。

「今気付いたんですけど、那雲君の超能力は『風や大気进行操作する』でしたよね？」

「…ああ」

「それならば『空気の壁』を作ればいいんじゃないですか？」

その言葉に、湖華が不思議そうに顔をしかめた。

「んな無茶な…そんなスッカスカの壁すぐ貫いてまうやろ」

「いや、そうでもないと思いますよ」

「？」

「僕達の住むこの地球は、大気や空気の膜によって太陽からの強すぎる紫外線を防いでいます。空気というものは、実はレンガ造りの

壁より丈夫だつたりするんですよ」

「……………アンタ、何で成績最下位のクセにそんな事知ってんのや」

「まあそれはいいとして……………ようするに自分の前に空気を集めて『見えない壁』にすればいいのでは」

「……………もう一回頼む」

那雲は立ち上がった。影也の言っている事はもつともだ。

今まで『攻撃性』しか考えてなかったけど、自分の超能力は実は『防御性』に優れているのかもしれない。

わずかな可能性が生まれたからにはいざ実行である。

散乱したビービー弾の中心地に立つと、湖華を促す。

湖華は弾を詰め直し、もう一度那雲に銃を向けた。

目を伏せる。

常人にはできない『空気を感じる』

（この室内には…窒素76，15%酸素22，36%二酸化炭素0，038%アルゴン1，287%…）

頭の中に浮かぶ莫大な数字というデータ。

それをゆつくりと誘導し、自分の前に持つて来る。イメージは、カーテンを引くように膜を作る。

完了。

ゆつくりと目を開いた。同時に湖華が引き金を引く。

乾いた銃声が連発した。那雲はその場から動かない。一步も動かない。

弾は一つも当たらなかった。那雲の一步手前で勢いを失って床に落ちる。

バラバラと那雲に触れられなかった弾が足元に散らばった。

「な…ッ!？」

引き金を引いた湖華は勿論、影也までもが息を呑んだ。

（まさか、少し助言しただけでここまでできるとは…）

しかし、当の本人は無言だった。虚ろな目をしたまま、どこか遠く

を見ている。

そして、次の瞬間。ビー球散らばる床に倒れ込んだ。
青い顔でブツブツと何かを呟いている。

「お…おい那雲どうしたんや！平気か！？」

「那雲君！？」

慌てて二人が駆けつけると、那雲はぐったりした表情のまま声を絞り出す。

「さ…酸欠…」

「……………」

どうやら自分の超能力のせいで酸素を極限まで奪われたらしい。

呆れた二人は目を合わせると、那雲に背を向けた。

「…行こか。アホはやっぱアホやったな」

「ですね」

去って行く二人の背中を、童もすぐる思いで見つめる。

古びた鉄筋コンクリートの室内で、那雲は悲痛なヘルプの声を上げた。

7、攻撃性と防御性が戦つとどちらが勝つのか（後書き）

キャラクター紹介5

● やまかわうみかぜ 山川海風

那雲のクラスメート。愉快な名前は祖父が命名したとか。
明るくて能天気なお調子者で、女好き。

好みのタイプは『文学少女』はたして彼に彼女ができる日はくるのか。

那雲のことが気になるようで、しょっちゅう声をかけては那雲に引かれている。

8、事前準備と舞い込む以来

「……であるからにして、塩化銅水溶液を電気分解させると物質は塩素と銅に分かれ……」

肘をついて窓の外をボンヤリと見つめる。

那雲は只今絶賛上の空中だった。

どうせ聞いても分からない授業なら、聞かない方がいいというのが那雲の言い訳だ。

今日も空は真つ青だ。気持ちいいほどの青空。

これが五月晴れというものののだろうか。

入学してからはや三週間目。（何だかたったの三週間で十年分の濃い日常を過ごした気がするが……）

一年生もだんだんと学校に慣れてきて、入学したての嫌な緊張感は消えつつあった。

そして、そんな時期を狙ってあるイベントが学校に訪れようとしている。

そのイベントの名は『K S F』

『鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル』の略称である。

早い話が『運動会』だ。

運動会といえば秋に行うイメージが強い那雲だったが、この学校では秋には学園祭や合唱祭などがあり、行うのが困難なためこの時期に持って来たそうだ。

また、学校曰く『クラスの団結力を高める第一歩』らしいが那雲はその手の団結系のイベントにはとことん関心がない。

那雲のクラス1 - 2も現在は応援幕や旗作りなどで盛り上がっているが、一人だけテンションが上がらずにいるのである。

何故か昨日の放課後は女子達に無理矢理旗の色塗りをさせられ、準

備期間からあまり良い思いでない。

今後のことを考えると自然と溜息が漏れた。

と、そこで「那雲くん」という小さな声かけられる。

声のした方を向くと、女子から手紙を渡された。その向こうの席で山川海風がピースしている様子を見ると、この手紙の送り主は彼らしい。

とっても嫌そうな顔をして折りたたんだしわくちやの紙を開くと、中身にはこう書いてあった。

『那雲は巨乳派？それとも貧乳派？オレ的には巨乳なんだけどやっぱり小さいのいいと思』

最後まで読まずに手紙を握りつぶす。

心底恨めしそうに山川に視線を向けると、彼はにんまりとした笑みを浮かべていた。早く手紙の返事を書けと目で訴えている。

ピキ、とこめかみに血管が浮かんだ。

刹那。

ビュウオオオオオオオ！というすごい轟音とともに教室内に突風が巻き起こる。

教科書やノート、プリントなどが飛びまくり、室内はプチパニックになった。（何かカツラのような物も飛んでいた気がしたが、見なかったことにしておこう）

窓側の生徒達（那雲を除く）は慌てて窓を閉めるが、それが無意味だということは那雲が一番よく知っていた。

（またやつちまった…）

ガックリとうなだれる。昔からイラっとなると超能力が発動してしまふのは悪い癖だ。

一段落ついて授業が再開すると、またしても手紙が送られて来る。

ただし先ほどと異なるのは、イキナリ虚空から手紙が現れ那雲の机の上に着地したことだ。

ビックリして思わず飛びのいてしまったが、落ち着くとそんなこと

ができる奴には心当たりがある。

ノートの切れ端を利用したらしい手紙の内容はこうだった。

『那雲君、また超能力使いましたね。いいかげん制御して下さい、馬鹿ですか貴男は』

この毒舌っぷりは間違いなくアイツだと確信する。

（つうか、この教室内だけじゃなくて二年の階にも被害あったのかよ……）

再び盛大な溜息をつく那雲に、不思議そうに周りの視線が集まった。

「ホンマいい加減にしいや、ウチのクラスなんて習字の授業やったんやよ？墨は飛ぶは作品はメチャクチャだわ…一発殴りたいくらいや」

と、部室に入ったとたんピンクリボンのお嬢様に詰め寄られる。

「いや…だからそれは仕方なかったんだっつーの。クソ、山川の野郎…半殺しにしてやる…」

「まあ何にせよ、那雲君が超能力を使ったお馬鹿さんであることに変わりはありませんよ」

湖華をなだめる爆裂美貌の影也だったがまったくフォローになっていない。

湖華が点てたお茶を飲みながらみんなでトークキング。

もうこの光景にも大分慣れてきた。

「でもまあ僕のクラスは運の悪いことにK S Fの準備中でしてね…横断幕が一枚突風で飛ばされて駄目になりました」

思いつきりトゲのある台詞せりふを投げかけてくる影也に言い返す言葉もなかった。

話題を変えようと那雲は口を開く。

「そつえばお前らは何色だ？」

何色、というのはK S Fのクラスカラーのことだ。紅組、白組、青組、緑組、オレンジ組、紫組の六つの色がある。

毎年くじ引きで色が決められる。たとえば1 - 1組と2 - 5組と3 - 2組が同じ紅色ならば、その学年の違う三組は同じ『紅組』というチームになり、ほかの色の組達と得点を競うことになる。

このクラスカラーは結構重要で、陸上部が多いクラスと美術部が多いクラスとでは明らかに得点も違ってくる。

なのでくじ引きの中身を細工しようとする不屈き者も毎年少なくともいるらしい。

「僕の2 - 4は青組ですよ」

「ウチは2 - 1やからオレンジ組や」

「げっ、影也と同じチームかよ…」

那雲が思わず漏らした声に影也はすぐさま食らいつく。

「げっ、とは何ですか那雲君…青組で頑張って優勝を目指しますよ」

「いや、今年の優勝はオレンジ組がもうで」

どうやらどの色も優勝を目指すという目標は同じらしい。

ふと、打倒オレンジ組——！と騒いでいた影也が急に静かになってこちらを向いた。

「でも油断は禁物ですよ。機械人間アンドロイドが襲って来る可能性も高いですから」

久々に聞いた『機械人間アンドロイド』という言葉に那雲はすぐさま反応した。

「は…っ！？またアイツが来るってのか！？」

「恐らくは。K S Fは一般公開ですからね。学校の警備も普段より緩まりますし、沢山の来客やお祭り騒ぎに生じて襲いやすいはず」

「連中にとつては絶好のチャンスゆうことやな、気を付けや那雲」

「マジかよ…」

ときとうにK S Fをやりすごそうとしてた那雲にとつては予想外の大迷惑である。

「何にせよK S Fはオレンジ組が勝つでー！」

ガッツポーズをして早くも勝った気マンマンの湖華だったが、そこで不意に部室の扉がノックされた。

不思議そうに眉をひそめる。影也は冷静に「どうぞ」と訪問者を促した。

「…つと、ここが金持ち部だったよな？」

勢いよく扉を開けて入って来たのは、一人の男子生徒だった。

肩の辺りまで伸ばした茶髪に、耳に空いたピアス。第三ボタンまで外したシャツと首にかけた十字架のネックレスが、異様な色気をまとわりつかせていた。

一言でいうなら『チャライイケメン』

那雲が暗い不良なら、この生徒は明るい不良というタイプだ。

ずかずかと部室に入って来た謎のイケメンは、求められていないのに勝手に自己紹介をし始めた。

「ども…俺は一年三組の学級委員の紀崎^{きさき}蔭^{かげ}艶^{つや}。ちつと困った事があつたもんでこの金持ち部に依頼にきたんだケド…」

完全に引いている影也達に構いもせず、蔭艶はソファに座っている那雲に目を止めた。

「お、お前が隣のクラスで有名な涼原那雲？俺と同じで結構イケメンじゃん」

「……」

どうやらコイツは自分を『顔がいい』と認めているらしい。
絶対付き合っている彼女が五人も六人もいるような奴だ。

学級委員になったのだって、きつとクラスの女子が推薦したに違いない。

「…俺の事はいいからさっさと要件を言え」

ムカついた那雲が冷たく言い放つと、蔭艶がニツと笑った。

「無愛想だな」だからお前顔イイのに女子から人気ないんだぞ？要件についてはさっき言った通りだ」

ペラペラとしゃべる蔭艶に、今まで黙っていた湖華が立ち上がった。

「…悪いけど、ウチの部はそういうんじゃないんや。困りごとなら他に相談しや」

「ふ〜ん…ここなら何とかしてくれそうだったからな」

警戒の意を含む湖華の瞳をじつと見つめる蔭艶。

「…それに」

少し低い声で呟くと、数歩先の湖華に歩み寄る。

何のためらいもなく顎を上向かせると、素早く唇を奪った。

「……………ッ!？」

口をふさがれた湖華は驚いて目を見開いた。那雲と影也は予想外の展開に硬直する。

湖華の華奢な腰を抱き寄せた蔭艶は口付ける力を強めた。吐息をも絡めとろうと舌を入れた所で、湖華が蔭艶を突き飛ばす。

「……………アン…タ!？」

「俺、可愛い女の子って大好きなんだ」

キスされた唇を覆う湖華を見て蔭艶は笑った。

見かねた那雲は湖華の前にかばうように飛び出した。影也もそれに続く。

「…てめえ、イキナリ何だってんだ!」

かっとなって叫ぶ那雲に、蔭艶は楽しそうに目を細める。

「あれ?もしかして君ってこの娘のこと好きなの?じゃあ悪いことしちゃったね」

「……んだと」

那雲は鋭い目つきで目の前の男を睨みつける。だが蔭艶はひるまない。

「でも俺の依頼を受けてくれないなら、彼女がどうなっても知らないよ？彼女、かなり美人だし。俺は構わないけどな」

挑発するように笑う蔭艶は、那雲達に庇われている湖華に視線を向ける。湖華はビクツと肩を震わせ、視線を逸らせた。

ギリ、と那雲が耐えかねて歯ぎしりした時だった。影也が前に歩み出る。

「……分かりました。その依頼、お受けいたします」

「影也！？」

「へーさっすが学校一の美男子、三苑センパイ」

「ちょ…なんでだよ！？」

詰め寄る那雲に影也は小声で言った。

「湖華に何かされても困る。ここは言う通りにした方がいいです」

「……ッ」

悔しくて仕方がなさそうに顔を背ける那雲に、蔭艶は言う。

「よろしく、那雲くん」

こうしてK S Fの事前準備で慌ただしい那雲達に、さらなる厄介な依頼が舞い込んだ。

8、事前準備と舞い込む以来（後書き）

キャラクター紹介6

●紀崎蔭艶きざきかげつや

那雲と同じ一年で、1 - 3の学級委員。

そのルックスのせいで女子からはかなりの人気があり、彼女の数も未知数。

那雲のことを何かとライバル視している模様。

目をかけた女子にはキザな言葉をかけまくって口説き落とす。
今回、湖華を気に入ったらしい。

9、襲撃計画と新たなる黒幕

「ったくよ…何でわざわざ俺らがあんな奴の依頼を受けなきゃならねえんだよ…」

愚痴を零しながら廊下を歩く那雲。『あんな奴』とはもちろん蔭艶のことである。

ちらり、と視線を後ろに向けた。湖華は相変わらず俯いて歩いている。

先ほど、蔭艶にキスされてからというものの様子が可笑しい。

ふう、と溜息を吐いた。

こんなことになったのは影也^{あいつ}のせいである。

数分前。

『で、その依頼ってのは何なんだよ』

影也が了解したせいで、那雲達は蔭艶の依頼を受けることになってしまったのだ。

蔭艶は勝手にソファに腰を下ろすと話始める。

『ここ二、三日の間で連続してウチの教室の窓ガラスが割れてるんだよ。怪我人はいないんだけど、女子が怖がっててさ…』

ウンザリするように眉を潜めた那雲に気付かず、話は続く。

『ガラスは内側から割られててさ…何か得体の知れないものがあるかも、って一時大騒ぎになったんだよ』

『………で、それを僕たち金持ち部に解決してほしい、と？』

影也の問に、蔭艶は力強く頷く。

『……あの…分かってると思いますが、ここは金持ち部ですよ？まずその手の事はオカルト研究会などにまかせるとか…』

『金で解決できないことはないだろう？』

『…………。』

蔭艶の思考回路に呆れて黙る。

『……出来る限りのことは尽くします』

影也の重々しい声に、蔭艶はニツと笑ったのだった。

このような流れにより、那雲と湖華は問題の窓ガラスが割れた教室
『1-3』を調べることにしたのだ。

ちなみに、蔭艶は一旦『クラス応援のリハーサルをやるから』と言
って引き上げ、影也は何故か部屋に残って一人で『窓ガラス割れ事
件』を推理するというのだ。

影也にとっては珍しく、自分から行動しない。

何か訳があるのかとこっそり聞いてみた所、返された言葉は短かつ
た。

『湖華を慰めてあげて下さい』

とただ一言。

（たしかに、アイツの毒舌じゃ慰められる訳ねえよな…）

影也なりに気を使ってくれたのかもしれない。

そう思い、先ほどから湖華を気にしているのだが、一向に普段の調
子に戻らない。

一年三組に向かう那雲の後ろを頼りなさ気について来るだけだ。

階段を下り、一年生のフロアに着く。多くの生徒が床に横断幕を敷
いて色塗りをしていた。

中には調子に乗って絵具のバケツを零し、女子に怒られているもの
もいる。

生徒は、心からKSFを楽しみにしているようだ。

「…ッと、ここが一年三組」

一年三組の教室には誰もいなかった。きっと蔭艶の言う、応援のリ
ハーサルとやらに行ってしまったのだろう。

ガラリと扉を開け、教室の中に入る。湖華は相変わらず俯いたままだ。

誰もいない教室というのも寂しいものだ。黒板にはでかかど『KSF優勝するぞー!』とチョークで書かれていた。

薄い色のカーテンを開けると窓には確かに割られた後があり、予備の窓ガラスがぎこちなくはめられてる。

「……特に変なことはないよな、湖華」

「……そやね」

やっと返事をしてくれたが、その声は消えてしまっくらいか細かった。

少し気まずさを感じたので、踵を返して他の窓も調べる。

窓から見える校庭には、教師陣で引かれた白いラインが魔法陣のよううに浮かび上がっており、今は校庭の四方八方に旗がくくりつけられている所だった。

（……KSF、か）

今さらながら心の中で呟く。

楽しそうに準備する生徒達。中学校ではそのような行事に参加することは極力避けていた。

なので、こういう準備風景は那雲にとって新鮮な物だった。

「……那雲」

鈴の鳴るような声で囁かれ、思わず上の空だった意識を取り戻させられる。

驚いて振り向くと、湖華が目を見せながら言った。

「ここにいるのも駄目やと思う……まずは周りの人に話を聞かんと」

「あ、ああ……」

確かに湖華の言っていることは正しい。やみくもに現場を調べていても何も出てこない。

まずは『窓ガラス割れ事件』について知っている人に聞いてみるのが一番だと思う。

ならば、と那雲は教室を出て隣の教室に向かった。自分の教室、一

年二組に。

廊下には青い横断幕が敷いてあり、皆で色塗りをしている最中だ。その中に混じって絵具を塗っている少年、山川海風に話しかける。

「山川、少しいいか」

「お、那雲！丁度いい、色塗り手伝っ……てあれ二年の秋ノ宮さん！？何でお前一緒にいる訳？まさかカノジョ……」

「黙れ、部活仲間だ！それより質問に答えろ。一年三組の窓ガラスが割れたの知ってるか？」

山川是那雲と湖華を交互に見比べ、思い出したかのように話し始めた。

「ああ、アレだろ？何か謎の突風でガラスが割れたってやつ！」

「……は？」

突風、という言葉が引ッ掛かった。それは、最近イライラして那雲が超能力で発生させてしまったものだ。

絡まっていた結び目がスルリと解けるように、事件の真相が浮かび上がって来る。

（…っうことは何？俺が思わず起こしちゃまった突風で窓ガラスが割れたってことか？怪奇現象じゃなくて？）

ものすごく単純な真相が判明し、その場に硬直する那雲。湖華もそれを悟ったのか、フウと溜息をついた。

（……っっーことは）

終了。

これにて事件は解決。

（なんじゃそりゃあああああああ）

馬鹿らしい。馬鹿らしすぎる。結局すべての原因は自分だったのだ。そんな撃沈している那雲の心な知る訳もなく、山川は慌てたように騒ぎ出す。

「そっいえば！青色の絵具が無いんだ！那雲、悪いけど倉庫から絵具取って来てくんない？」

「……ああ？」

「早く那雲！早く行かないと他のクラスに絵具とられちゃうぞ！！」

「……。」

那雲は泣きたい気分になってきた。こうなったらもう絵具でも何でも取ってきてやる。

「……湖華、悪いが付き合ってくれねえか？絵具のある倉庫の場所がわかんねえんだ」

「ええで」

ほのかに微笑を浮かべる湖華を見て、那雲は安心したように微笑んだ。

徐々にいつもの調子が戻ってきている。

湖華是那雲を誘導するため、前に立って歩き出す。

こうして改めて見ると、湖華は黙っていれば本当に綺麗な女だった。華奢な腰。触れただけで折れてしまいそうな手足。栗毛色の髪の毛は綺麗に波打っており、整った顔立ちを一層引き立てていた。影也が神秘的な美しさならば、湖華は純粋な優しい美しさということころだろう。

（……って俺何考えて…ッ！？）

慌てて湖華から視線を外し、頭の中の思考を掻き消す。

ふと、蔭艶から言われた言葉が頭をよぎる。

『君ってこの娘に気があるの？』

（……ッ、これじゃあまるで…）

フリーズした思考回路を必死に戻そうとした時、ふいに湖華が立ち止まった。

「着いたで」

指差す先には、本当に『倉庫』という感じの倉庫だった。

キャンプに行くとお目にかかる、バンガローみたいな小さい木の建物が校庭の隅にあった。

開いた扉から中に入る。絵具やらパレットやらが大量に積まれている。この中から青の絵具を見つけるのは時間がかかりそうだ。

「手伝つたる」

湖華と二人で倉庫に入った。乱雑に積まれた絵具の箱を、一つ一つ確認する地道な作業だ。

誰がこんなに集めたのかというくらいの画材用品の量。黙々と箱を開けて青色の絵具を探す。

しん、とした沈黙の中、ガサゴソという音だけが響く。おまけに室内は密室のせいaka少し熱かった。

（…ん？密室…？）

何かが引つ掛かった那雲は眉を潜める。

密室。

男女が二人きり。

（ないないないないないないないないない！変な事考えてんじゃねえよ！！）

湖華は普通に作業している。何を想像しているというのだ。

気を紛らわすため、唯一ある小窓を開けようと手を伸ばす。が、案外キツチリと鍵がかかっていた。

渾身の力を込めてロックを外そうと奮闘する。伸ばした手が痺れてきた頃、ようやく鍵が開いた。

（鍵堅く締めすぎなんだよ…… ってうおっ！？）

足元にキャンパスらしきものが辺り、上ばかりを見ていた那雲は転倒する。世界がぐるりと反転した。

「…… ってえ」

どうやら軽く頭を打ったらしい。頭を押さえて立ち上がろうとすると、何か妙な違和感を覚える。

——鼻先が付くか付かないかくらいの近距離に、湖華の顔があった。

「…… え… っ と、 那… 雲…？」

湖華は顔を真っ赤にさせてこちらを見上げている。

結論から言つと、那雲は湖華を押し倒していた。

「は…ッ!?」

ギシ、と古い木の倉庫の床が軋む。湖華は那雲にしっかりと縫い留められた形で横たわっていた。

那雲の黒髪が一房垂れた。湖華はくすぐったそうに身をよじる。

じんわりと汗が浮かんだ。互いの吐息がかかる距離なのだ、無理もない。

二人の視線がぶつかる。頬を紅潮させてこちらを見つめる少女を、不覚にも可愛いと思ってしまう。

半開きの口から漏れる吐息は、甘い香りがした。

まさに、唇と唇が重なるうとしたその瞬間――

ボッ!!という音が部屋の隅から響く。たちまちそれは爆発的に大きな火柱となった。

(炎…ッ!?)

扉の辺りから上がった火は止まることをしらず、あっという間に部屋を飲み込んで行く。

一気に室内の温度が跳ね上がった。

タバコの火でもついたのだろうか――だが、迫りくる炎と熱さのせいで考えることができない。

パチッ、と炎がぶつかり合う音が響くたび、火柱は急に大きくなる。ふいに、何かが那雲の肩に寄り掛かる。

――それは、意識を失った状態で倒れ込んで来た湖華だった。

「お、おい!? 湖華!?!」

必死に抱きしめて叫ぶが、当然返事は返って来ない。

煙の臭いが鼻をつく。まるで頬が焼かれそうな熱さだ。油絵に使う絵具のせいで、炎はどんどん勢いを増す。

ゴオオオ!!とすぐそこまで炎が迫る。

(……どうする?)

このままでは二人とも焼け死んでしまう。こんな時、影也の瞬間移動があつたらどんなに楽か。

ここから脱出、あるいは火を止めなければ。

だが、脱出しようにも発火地点が出入り口なのだ。わざわざ火の中心地に飛び込む奴はいない。

窓は狭すぎて通ることさえ難しい。

大量の汗が、頬を伝って落ちた。

——どうする…！？

その部屋は、闇に覆われた黴臭い部屋だった。

棚に入った不気味な光る液体が、唯一の光源。

その液体には一つ一つラベルが貼ってあり、あるビーカーには『超能力者遺伝子』という文字が記されていた。

そんなある総合病院の奥地で、クスリと少女は微笑む。

「涼原那雲達は、仕留めたの…？」

茶色い髪をボブにした美少女は、自分に膝枕をしている少年に呼びかけた。

「いや。失敗だったみたい」

楽しそうに微笑むと、少女——早峰沙帆の頬に触れる。

「でも、倉庫に入った所に火をつけたんでしょ…？」

沙帆は、愛おし気に頬に触れる少年の手を包み込んだ。そして恋人に愛を囁くかのような声で言った。

「どうやって生き延びたのかしら？秋ノ宮湖華はあなたの睡眠薬のせいで役に立たなかったんでしょ…？」

「……ああ。確かに湖華にはクスした時に睡眠薬を流し込んだ」

「あら、でも睡眠薬じゃなくて毒でもよかったんじゃない？そうしたらすぐ殺せたのに…」

すると少年は身を起こし、静かに沙帆の唇を奪う。

「…言っただろ。俺は可愛い女が大好きなんだよ…あの女は、殺すのは勿体ない」

「フフ、妬けるわね」

抱き寄せられた沙帆は、艶麗な微笑を浮かべる。

少年の指先が、沙帆の身体を這う。だが、その肌は人間の肌ではなく、精密機械が埋め込まれていた。

「涼原那雲…どうやらアイツの超能力で室内の酸素を奪い、火の広がり止めたらしい」

「火は酸素がないと燃えない…考えるじゃない」

「そして酸欠で自身も倒れた所を、三苑影也に発見された」

少年は、眉を潜めた。

「三苑影也…アイツは気をつける。あの男は妙に鋭い。俺のことも少し疑っていた」

「まさか…あなたが『超能力者』だとばれたの…？」

「……かもな」

沙帆の表情が険しくなった。だが、少年はいよいよ楽しそうに口角を吊り上げる。

「本当のショータイムはKSFの時だ。…次こそ仕留める」

「その時は、私にも加勢させてね」

暗い暗い病院の中で、少年の瞳がきらつく。

——それは、立派な殺意だった。

「ああ、もちろん…」

三日後、波乱のKSFが幕を開ける。

9、襲撃計画と新たな黒幕（後書き）

と、いう訳で次回からK S F編の予定です。

頑張って近々更新します（多分）ので、無事に更新されることを祈って下さいますと幸いです。

ウチの学校は只今文化祭の準備中です。忙しいです。

…… 本当に近い内に更新できるのか

10、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？（前書き）

プログラム

- ・開会式
- ・一年男子による『徒競走』
- ・二年男子による『食い物競争』
- ・二年女子による『タイヤバーゲン』
- ・三年男子による『騎馬戦』
- ・一年女子による『借りもの競争』
- ・三年女子による『背渡り』
- ・一年による『玉入れ』
- ・二年による『障害物競争』
- ・三年による『綱引き』
- ・昼食
- ・色別大玉転がし
- ・部活対抗リレー
- ・色別対抗リレー
- ・閉会式

10、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？

空は、これでもかというほどの快晴だった。

太陽に照らされた運動場は白く輝いており、応援席には聳え立つそれぞれのクラスカラーの旗。

ピシッとした運動場のため、校舎までもが輝いて見える錯覚を覚える。

運動場の端と端に立っている六つの色のチームはそれぞれ闘志を燃やした凄まじいオーラを放っており、ピリピリとした緊張感が伝わって来た。

K S F 開会式からこの有様である。

只今青組の中に紛れて早くもやる気喪失している那雲は流れる汗を拭った。

（熱っちい…帰りてえ…）

だがそんな那雲の切実の願いが届くはずもなく、長さでお決まりの『校長先生の挨拶』は続く。

「日頃培ってきたクラスの団結力を存分に発揮し、今日このK S Fを皆さんの力で盛り上げて行きましょう！」

締め言葉とともに、大地が唸るかのようなやる気マンマンの掛け声上がる。

「うるせえ…」

耳を塞いでやり過ぎす那雲に、隣に立っている影也は呆れて溜息をつく。

那雲のクラス1 - 2と、影也のクラス2 - 4は同じ色の同じチームなのだ。

なので那雲の額にも影也の額にも青色のハチマキが巻かれている。

「那雲君…もう少し緊張感というものを持つたらどうですか…今日

は『奴ら』がやって来るかもしれないですよ」

影也の忠告も上の空だ。

「でもよ……お前がこの前言ったこと、本当なのか？」

この前言ったこと、というのは那雲と湖華が倉庫に閉じ込められ、火を放たれた時のことである。

超能力で酸素を奪い、炎を消した那雲だがその後酸欠で倒れ、影也の手で部室へと運ばれたのだ。

倉庫が焼けた件については、またしても『少々難儀な科学実験を行い燃やしてしまった』と影也が大ウソをついたので事故として片付けられた。（もちろん修繕費は金持ち部で出した）

そして目を覚まし、落ち着いた那雲と湖華に影也は自分の考えを述べたのだ。

『僕が思うに……あの依頼者の蔭艶さんは怪しいです』

『怪しい……って、まさかあいつが火をつけたとでも言うんか!？』

『それは分かりませんが……あの依頼そのものがダミーだった可能性が高いんです』

『どういうことだ？あれは俺が起こした突風のせいじゃなかったのかよ?』

『それはあり得ないはずですよ。それなら、あの教室だけじゃなくて他の教室の窓も割られてるはず』

『確かに……でもそれはガラスの強度があそこだけ弱かったとしたらどうなるんや』

『強度は関係ありませんよ。それに、彼の言った言葉の中に何か不自然な言葉があるのに気が付きませんでしたか?』

『んなもんあったか……?』

『彼は言いました。ガラスが何者かに内側から割られたのでは、と』
『そのどこがおかしいんや』

『考えてみてくださいよ、那雲君の起こした突風ならば衝撃は外側から来る。つまりガラスは外から中へというように割れる』

『……』

『だから那雲君のせいならば、ガラスが内側から割れるというのは絶対に有り得ない』

『言われてみれば……』

『ちよい待ち、そんなら蔭艶はなんやったんや？何のためにこんなことを……』

『……ひよつとしたら彼は機械人間達の協力者かもしれません』

『！？アイツが……？』

『確信はありませんが…… K S Fは気を付けてください。連中はどんな手を使っても僕らを捕まえに来るはずです』

昨日のやり取りが脳内で再生される。

影也はんなもん知るかというように腕を組んだ。

「あれはあくまで僕の想像です。本当の所は分かりませんよ」

「ま、何にせよ今日を乗り切ればいいんだろ？任せろ」

お気楽の那雲に呆れながら苦笑する。と、そこに背後に人影が立った。運動場がいつもより綺麗なので、人の影はハッキリと分かる。

振り向くと、綺麗に波打った髪をリボンで纏めた湖華が得意げに立っていた。額にはオレンジ色のハチマキがしっかり巻いてある。

体操着姿でも、纏っているお嬢様オーラは消えていない。

「なんや随分余裕やな、青組さん？」

「……何か用ですか」

影也も湖華とは今日一日は敵同士なので冷たくあしらう。

「言つとくけどな、ウチらオレンジ組は強いぞ？覚悟しいや」

「……言いましたね。その言葉、閉会式の後でも言えるんですか？」

両者が睨みあう。

二人とも、数日前にあんなことがあったのにあまり気にしていないようだった。

特に湖華。那雲と倉庫の中で何があったのか——まさか忘れている訳ではないだろうが、いたって変わった所はない。

(……別にいいけどな)

自分一人で気にしているのが恥ずかしくなってきた那雲は、振り払うようにハチマキを締め直した。

影也と一通り言い合った湖華は「青組ぶっ潰したるで!」といいながらオレンジ色の応援席に戻って行く。

ちなみに、応援席は基本同じ色のチームなら誰といような関係ないので、学年の違う影也といても誰も不審がらない。

だが影也といるところらの女子が写真を撮ろうと殺到して来るのがたまに傷だ。

那雲に言わせれば、影也コイッの体操着姿などわざわざ写真に収めようとする奴の神経を疑う。

まあ、顔がいいのは認めるが。

と、そこで唐突に放送委員のアナウンスが響いた。

『では初めに、一年男子の徒競走を行います。該当する生徒は、至急入場門に集合して下さい』

一年男子、該当する那雲は慌てて入場門へと走る。背後からは「頑張って下さいね!」という影也の声が聞こえた。

見ると、一年男子は早くも入場準備をしていた。山川に急かされ、青組の群集へと突っ込む。

整列し、校庭のど真ん中に進む。

那雲は身長的に、走るのは最後から三番目だった。本当は最後付近は追い抜き争いが激しく、プレッシャーもかかるため嫌だったのだが。

事前に決めた通り、インコースから順に白、オレンジ、緑、紫、紅、青と並ぶ。

(そついやあ、うちの組はアウトコースだったな…)

はやくもやる気をなくした那雲だったが、応援席からはそれぞれの色が懸命に応援の声を張り上げている。

パアン!と勝負の幕を開ける銃声が響いた。放送委員がすぐさま『天国と地獄』を流し、余計に辺りを盛り立てる。

一人が走る距離は百メートル、つまりトラック半周だ。

遠目で見ると、現在の様子は速い方から順に青、紅、オレンジ、紫、緑、白となっていた。

一番なことに何となく安堵しながら出番を待つ。

と、半分意識が飛んでいた那雲の肩に軽い衝撃が走る。どうやら隣の色の人にぶつかっただけらしい。

「悪い……」

謝りながら振り向き、硬直する。

「おや、何だ君か」

そこにはあのチャライケメンの蔭艶が立っていた。頭には紅色のハチマキをしている。

『僕が思うに……あの依頼者の蔭艶さんは怪しいです』
影也の声が脳内に蘇る。

さっ、と那雲の顔が険しくなった。

……コイツは、何者なのだろうか。

「な、なあお前……」

言いかけた所で、那雲が走る番になった。急いでスタート地点に立つ。

蔭艶は不思議そうな顔をしたが、すぐに微笑を浮かべる。

「負けないよ」

微笑みかけられ、ケツと視線を逸らした。

「用意」

サッ、と那雲と蔭艶を含む六人がクラウチングスタートの姿勢をとる。

パン！という威勢のいい音とともに前に飛び出した。そのまま全力で走る。

『青、速い！おっとだが紅も追い上げる！！』

完全に那雲と蔭艶の接戦になっていた。だが、同時にゴールすると思われたその時。

コッソ、とつま先に鈍い衝撃が走る。

「!？」

蔭艶の足が滑り込んだのだ。そのままバランスを崩し、転倒――

『おおっと青が転んだー!その隙に紅はゴール!』

トラックに転がった那雲は茫然するしかなかった。アナウンスを聞いて耳を疑う。

そして三秒後、自分のされた仕打ちに気付いた。

(あの…やるオ…ッ!?)

結局、青は三位だった。一位は蔭艶が大きく引き離したことがきっかけにより紅。

蔭艶は早くもクラスの女子に褒め称えられており、応援席に戻った那雲は影也に愚痴りまくった。

「うわーそれはいかにも蔭艶さんらしい…まあ大丈夫ですよ。次の『二年男子による食い物競争』で挽回します」

とやけに自身満々で入場門に向かった影也に首を傾げつつ、応援席に座る。

食い物競争とは名の通りで、竹竿にぶら下がったパンを食べながらゴールを目指すリレーだ。

ただし運が悪いと『カラシたっぷりパン』や『ジャンボパン』に当たってしまう。食べ終わってからゴールしないと反則なので、これらのパンは大ダメージである。

ワッ、と気が付くと周囲が盛り上がる。第一走者がスタートしたのだ。影也は身長から見て、走るのは最後になりそうだ。

「青組ファイトオオオオオオ!」

山川が声を張り上げた。このクラスだけ異様な盛り上がりである。

「影也様が走るまで一位をキープウウウウウウ!」

「影也様応援しまーす!!」

(そういうことかよ……)

おそるべし影也の力。顔がイイ奴はこれだから調子に乗るのだ。いつの間にか辺りは影也コールになっていた。ちなみに青組は現在

応援むなしくビリである。

そしてそのままバトンは最終走者へ。

「きゃああああ影也様あああああ！」

「頑張つて下さい影也さまあああああ！」

「青組ファイト——！！」

影也は女神顔負けの笑みをこちらに向けながらバトンを受け取る。

瞬間、那雲は驚愕のあまり目を見開いた。

影也は一瞬の内に消えては現れ、消えては現れを繰り返す。そして他の走者をあつというまに追い抜きながらパンへとたどり着いた。

『お、おお！鶴城ヶ丘一の美貌を誇る三苑影也！まるでコマ送りのような速さだ——！！』

「きゃあああ素敵影也様あああああ！！」

「愛してるううううう！！」

（あ、アイツ超能力バリバリ使つてんじゃねえかよ！！そしてその速さに何の疑問も抱かない周囲もどうなんだ！？）

巻き起こる影也コールと歓声の中心地にいる那雲は、頭痛がしてきたため一部始終しか分からなかったが、影也のおかげで青組は一位だったようだ。

競技を終えた影也が応援席に戻ってくる。

那雲は呆れて責め立てようとしたが、その前に影也は女子の大群に囲まれた。

誉められまくりの影也は、世界がとろけてしまいそうな笑みを浮かべるところ言う。

「僕一人の力ではありません。応援してくれた皆さんあつての一位ですよ」

その破壊力に、女子全員が顔から湯気を出す。数人がバタバタと倒れた。

「皆さんありがとうございますーあ、那雲君」

「……影也、お前なあ……」

ものすごく遠い目で影也を見るが、当の本人はニコニコ笑顔を崩さない。

「ね、言ったでしょ。これで青組の未来は明るくなりました。」

「俺の心はお前のせいで暗黒だぼけえええええええええ」

「世の中、勝つてなんぼですよ。あ、それとも自分は活躍できなかったから悔しいんですか？ピュアですねえ」

「ブツ殺すぞてめええええええええええ」

「そうやこの卑怯者おおおお！」

ふと、聞きなれた声が割り込んだ。湖華はずかずかと青組の応援席に割り込んで来る。

「アンタ瞬間移動なんぞ小賢しいマネしはつてええええ、次の競技は覚えときいいい」

怒り頂点の湖華は影也の襟を締め上げると、さつさと入場門へと走って行つた。

せき込む影也を無視してプログラムを見ると、次は『二年女子によるタイヤバーゲン』と書いてある。

タイヤバーゲン、とは文字の通り、校庭の真ん中に積まれた数十個のタイヤを取り合うものだ。

自陣により多くのタイヤを運んだチームが勝ちとなる。

この競技は『女の本性が出る』と男子に恐れられているらしい。

K S F 後、急に別れたカップルの男子に別れた原因を問うと『タイヤバーゲンの時の彼女が恐ろしかったから』と答えたらしい。（昨年の新聞部調べ）

そんなこんなでこの競技は何かと存在感が強い。

(ん、まてよ…タイヤを運ぶ…?)

何かとてもやな予感がした那雲。

だが、その予感は数分後にすぐに的中する。

「あの愛らしいお嬢様、秋ノ宮湖華はなんとタイヤ十四個を抱えて

自陣に放り込んだ——！？」

オレンジ組の応援席からは「秋ノ宮先輩恰好い——！！」などという歓声が上がっていた。

タイヤ十四個。湖華は一人で全体の内の八割をゲットしたことになる。

（あいつまでええええええ！！）

一見怪力に見えるが、湖華は自身の超能力でタイヤの重さを軽くしたのだ。

もちろん、そんなことをされてはオレンジ組ぶちぎりである。

「うーん、湖華も突っ走りますね〜」

巻き起こる歓声とどよめきの中、那雲は呆れて物も言えなくなった。

（もうコイツら超能力全開で隠す気ねえな……）

とても虚しい気分になってきた那雲はガツクリと肩を落とす。

そして、さらに競技が進むことに生徒達の盛り上がりは増した。

ぬける様に高い青空はその様子を黙って見下ろす。

———その中に立ち込める黒い暗雲がだんだんと近付いているのを見つめながら。

11、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？

ふと、那雲は頭の中に沸いた疑問に頭を傾げた。

（今のところ変わったことはねえな…あいつらはいっ動くんだ…？）

タイヤバーゲンが終了し、現在は一年女子による借り物競争の真っ最中だった。

ようやく思考が落ち着いてきた那雲は、応援席でふと考える。

クラスの女子が競技のため応援席を離れたせいで、只今足を伸ばして座りたい放題の那雲だ。

「那雲君、ひよつとして怖いんですか？」

心を読んだかのごとく、影也が口を挟んで来た。

那雲は少し驚いたのち、ポツリと言葉を紡ぐ。

「怖い…とかそんなんじゃない、別に俺が死のうが構わない。だが……」

那雲は顔を上げた。

運動場は活気に満ち溢れており、多くの生徒がプログラムを広げて笑顔で自分の組の応援をしていた。

本当に、心からこの学校の生徒はK S Fを楽しんでいる。

「このK S Fを台無しにするようなマネは許しておけねえ」

目を細めてキツパリと言い放った那雲に、影也は微笑を浮かべた。

「そのようですね」

なおもクスクスと笑う影也を振り返る。

「…んだよ、俺が何か変なこと言ったか？」

「いえ、すみません。ただ…最近の那雲君は少し雰囲気柔らかくなったような気がする」

「はあ！？」

影也はどこか遠くを振り返るような目をして空を見上げた。

「入学したての時…覚えていますか？那雲君は、初対面の僕にい

きなり殴りかかって来たんですよ？」

「ああ…そんなこともあったな…」

正直、あまり思い出したくはなかったのだが仕方がない。

今でも時々あの時の自分は大層格好悪かった、と思う時がある。

あの頃はただ、自分のことが憎くて憎くて仕方がなかった。

なるべく人を傷つけないように、ということしか考えていなかった。

けど、現在^{いま}は――

隣にいる影也、オレンジ組で応援している湖華のことを考える。

こうして、自分の隣にいてくれる人ができた。

信頼できる仲間ができた。

それだけで、もう十分だ。

「な、なあ影也……ってうおおおお！？」

と、口を開きかけた所でいきなり背後から腕を掴まれた。

（何だ！？まさか奴らが――）

心臓が凍りつく思いで振り返ると、そこには青いハチマキを締めた同じクラスの女子が立っていた。

「那雲くん……あの、よかつたら私と一緒に来てっ！！」

腕を掴まれたまま引き摺られる。訳が分からず、何となく女子生徒に従ってしまった。

「ファイトですよー那雲くん」

呑気に手を振る影也を見ながら思い出す。今は借り物競争の時間だったのだ。

手を引かれながらよく見ると、女子生徒は小さな三つ折の紙をしっかり握り締めている。

その紙に書かれているのは『身長180センチ以上の男子』だった。ふと、そこで那雲の頭に疑問が浮かぶ。

たしかに那雲は身長181センチでギリギリ借り物競争の条件には当てはまる。

だが、那雲は背の順で後ろから三番目だ。つまり、自分よりも背が

高い人は他にもいる。

何故わざわざとっつきにくい自分を選んだのだろう？

「…お前」

「キヤアアアッ!？」

耳元で囁いただけで、女子生徒は飛び上がった。何故かその頬は真っ赤だ。

「どどどどうした的那雲君!？ホラ、ゴールはもうすぐだよ!」

「あ……いや、何でもない……」

やたら慌てて言う女子生徒に首を傾げる。そしてそのままゴールテープをきった。

『青組一位——っ!先ほどのタイヤバーゲンから点数挽回だ——っ!——!』

ウオオオオ、と青組の応援席から歓声が上がった。

何だかよく分からないまま参加した那雲だったが、一位だったのでまあいいしよう。

とそこで、一位の景品（景品といっても生徒会が作った手作りのメダル）を持った女子生徒が駆け寄って来た。

息を切らして、那雲を見つめる。

「あの…那雲君、走ってくれてありがとう…それで、その…私、那雲君が…」

急に視線を逸らして紅潮した頬を押さえる女子生徒に疑問を感じ、眉を顰める。

だが、次の瞬間。

「湖華スペシャルキイイイイイック!」

「ぐぼはっ!」

何故だか乱入した湖華が、那雲のわき腹に跳び蹴りを放った。

すさまじい力で吹っ飛ばされ↑（絶対超能力使ってる）ゴロゴロと地面を転がる。

地球と仲良くなっています状態の那雲の背中を踏みつけ、湖華は腕を組んだ。

どうして良いか分からずオロオロしている女子生徒があまりにも不憫である。

「アーン〜タ〜は〜何で協力しとる？何ちゃっかり一位取つとるんやアンタはあああ！！」

「はあ！？んなモン同じ青組みだから協力するに決まってぐおおああああつ！？」

那雲の背中を、湖華が運動靴で踏んだ。だが、その威力は華奢な少女のものとは思えないほど強い。

湖華は一時的に自分の体重を重くし、数百キロの力で上に押し掛かったのだ。

「待てっ、ちよお前…ギブっ…ぐおおおおっ！？」

まさにチーンという効果音が相応しい。

半殺しの状態にされた那雲は力無く横たわる。

「フン、次の競技で覚えときいや」

湖華はそう言い捨てると、颯爽と自分の応援席に戻って行った。

「ちっ…くしょあ…なんだよアイツ…何か変なことしたか…？」

——この時那雲は全く気付いていなかった。

実はあの自信過剰な美少女が、那雲の手を握る女子生徒に苛立ちを覚えていたことを。

女子生徒に次の言葉を言わせないように校庭の真ん中に乱入し、騒ぎを起こしたことを。

「…っ痛てて」

痣ができた背中をさすって立ち上がると、もはや次の放送が響いていた所だった。

『次は一年による玉入れだあああ！この競技はもつとも点数が稼ぎやすい！どの組も挽回のチャンスだ——っ！！』

テンションが上がりまくった放送委員につられ、一学年の生徒が一斉に入場する。

那雲は「ちよつとどいてね」とKSF実行委員に優しく声を掛けら

れた。

言われた通りにすると、今まで立っていた場所に玉入れ用のかごが六個設置される。すぐさま六つの色の玉がばら撒かれた。

「那雲、こつち！」

山川に引つ張られ、青組の整列の中に引き込まれる。

（一息つかぬ間に今度は玉入れかよ…）

重いため息を吐いた那雲だが、周囲のやる気は最高潮に達していた。何といってもこの競技が終わると一年の出番は午後まで無く、お楽しみの日に入ります。

また、玉入れは大逆転のチャンスとして、六つの色の順位が激しく入れ替わる競技だ。

一学年全員の目の色はとてつもなく恐怖だった。闘志が燃えすぎて学校が火事にならないか心配になる。

『ではでは、一年生の白熱したバトルをご覧ください！玉入れ、スター――』

パアン、という銃声と共に全員が駆け出した。

歓声と大勢の人ごみに流され、那雲の頭は混乱するばかりである。

（…ツとにかく、この競技さえ終わればあとは二、三年生の応援をして昼食！今はやるしかねえな！！）

徐所に周囲のテンヨンに飲まれていく那雲は、青色の玉を探し始めた。

早くもそれぞれの色の玉が飛び交っており、校庭は大混雑の嵐だ。

かごが立っている中心地に来ると、行きかう雑踏の隙間に青色の玉を発見する。

すぐさまそれを掴んで投げようとする那雲だったが、ある違和感に気付く。

（何だ…っ！？この玉…動かねえ！！）

玉なんて所詮布の塊だ。高校一年生の男子生徒が全力で持ち上げようとしても動かない、というのは可笑しすぎる。

頭の血管がちぎれるかと思うくらいの力でひっぱると、ようやく玉

が持ち上がった。

だが、その玉の重さが尋常ではない。数十キロ、いや数百キロはあるだろうか。

どうも、玉が重くなっているのは青組だけのようだ。あちこちで異変に気付いた青組の生徒達が騒ぎ始める。

「フン、青組さんは所詮こんなもんな」

ふと、白熱する運動場には場違いな鈴の鳴るような声が響く。振り向くと、やはり思った通り湖華が立っていた。

「おま……二年のクセに汚いマネして紛れてんじゃねえぞ!？」

湖華はフン、と微笑を浮かべる。分子操作で玉を重くしたのだ。

頭に來た那雲は、玉入れ用のかごを見上げる。狙うは只一つ、オレンジ色のテープが巻かれたかご。

「形成逆転だクソやろおおお!!」
手を翳した瞬間。

那雲を中心に、莫大な突風が巻き起こった。

その突風の塊は、オレンジ組の玉入れかごに向かって突き進む。

「な……っ!？」

風速約120メートル。

巨大クラスのハリケーンをも超える勢いで暴風がかごに直撃した。
ギギ……とかごが傾く。

中の玉がすべて零れれば、得点はゼロになる。

辺りの生徒がかごが倒れるという事を悟り、四方に散り始めた。
ズズーン!という音と共に、粉塵が舞う。

「な、何が起こったんだ……?」「かごが倒れたの!？」

生徒があたふたしながら見守る。すぐに粉塵は晴れた。
結果。

——六個のかごすべてが倒れていた。

「……………」

当然、どの組も得点はゼロである。

放送委員も予想外の展開に、中継を忘れて呆然としていた。
しばしの沈黙。

『り、両者引き分け——っ……!?!?』

ぎこちない様子の放送で、辺りからパラパラとまばらな拍手が起こった。

「盛り下げてどうすんやアンタはああああ!!」

「うるせええええ!先にやったのはそっちだろおがああ!!」

そんな中、何やら掴み合いを始める二人。

両者はゼエゼエと荒い息を吐きながら睨み合う。

と、そこで不意に第三者の声が割り込んだ。

「那雲君……?」

「あア!?!今取り込んでるんだ!!」

イラつきながら周囲を見渡すが、人が多すぎて誰に呼び掛けられたのか分からない。

視線を戻そうとした時、那雲は確かに見てしまった。

ある、少女の姿を。

体操服を着た少女の姿。

茶色い髪をボブにした、可愛い少女の姿。

まるで、感情というものが無い少女の姿を。

あの少女は。

あの少女の名は。

「……ッッ!?!」

口の中が乾いて声が出ない。

変わりに、その少女の人形のような唇が、動く。

口角を僅かに吊り上げて。

『また、合いましたね…超能力者、涼原那雲…』

11、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？（後書き）

すみません！投稿遅れました！！

十月は文化祭があり、忙しかったのです。（という言い訳）

しかも今週はテスト週間に突入してしまいました。

またしばらく投稿に間が開いてしまいましたが、どうぞ気長に待っていていただけたら幸いです。

また、ものすごくヒマな人は山吹がテストで成功することを祈ってください。

では、ご迷惑をおかけしますが、これで～

12、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？

その少女の姿を捉えた瞬間、全身が凍ったような感覚に襲われた。

機械のような瞳。

機械のような表情。

いや、彼女はホンモノの『機械』だった――

「那雲……？」

傍らにいた湖華が、硬直している那雲に不審そうに瞳を向ける。

行きかう雑踏のせいで、彼女には機械人間『早峰沙帆』の姿は見えない。
アンドロイド

張りつめていた糸が切れた瞬間、脳裏に浮かんだ言葉はただ一つ。

危険、と――

「……ッ来い！！」

身体が先に反応した。

ぐい、と湖華の華奢な腕をつかんで乱暴にひっぱる。

「どうしたん？那雲、何が――」

「いいから黙って来いッつってんだろ！！」

怒声を張り上げると、小さな肩がピクツと震えた。

そのまま脱兎のごとくの勢いで那雲は湖華の手を引いて走る。

生徒達を押し分け、運動場の土を蹴り上げ。

あいつは危険だ。

本能がそう叫んでいた。

逃げなければいけない。

那雲が逃げている先は、人気のない中庭だった。
とにかく人の少ない所に行かなければならない。

K S Fを楽しんでいる生徒達を巻き添えにするのだけは避けたかつ

た。

（巻き込まれるのは、俺だけでいい！）

乱れてきた呼吸を押さえつけ、額の汗を拭う。

ここは、中庭に続く道の一つだ。通路の端には数本の木が植わっており、涼しげな木陰を無数に作り出している。

湖華もそうとう疲れたのか、息を整えていた。

「なあ…何なんや那雲…」

紅潮した頬を伝う汗を拭いながらこちらを見据える。

「見ちまつたんだよ…ッアンドロイド機械人間を…！」

「！？」

湖華に驚愕の色が現れる。

「ホンマか！？何処でや！？」

「校庭の端…紫組の応援席の所だ」

湖華はガリ、と自分の爪を噛んだ。気が付かなかったことに自己嫌悪を感じているらしい。

「……で、此処に逃げて来たい訳やな」

「ああ」

盛大な溜息をつく湖華。

「アンタは本物のアホか！？」

「は…ッ？」

いきなり睨み上げられ、思わず口から漏れる疑問符。

「あそこにはまだ影也がいるんやよ！？何でアイツに知らせんて来た！？」

「はあ？別にあいつなら何とかなるだろ？」

「何でそないな事言いきれる！？」

那雲が発した言葉は本心からだった。

あいつは強い。アンドロイド機械人間一人に倒されるほどヤワではないだろう。

それに、影也の洞察力は人並みを超えている。異変にはすぐに気付いていち早く手を打つはずだ。

「相手は一人やないかもしれん、アイツ…蔭艶だつておる!!」

「でも、まだアイツは敵と決まった訳じゃ」

「黙って聞き!!」

一喝され、那雲の反論は遮られた。

「那雲は油断しすぎや! あいつらはウチ達…いやアンタを捕えにくるんやよ!? もっと氣イ引き締めんか!!」

「……ッ」

那雲は言い返せない。拳を堅く握りしめたまま唇を噛んだ。

それでも、俯きながら言葉を紡ぐ。

「……俺はどうなつてもいいんだよ、どうせ最後は奴らの良い様に使われる運命だ」

込み上げる気持ちを押さえつけ、顔を上げて湖華の瞳を射抜く。

「でもよ、この鶴城ヶ丘の生徒達は何の関係もない! だったら守らなきゃいけないだろおが! 俺が死んだとしても!!」

「……」

湖華の表情は硬いままだった。だが一瞬泣きそうな顔をして、それを振り払うように那雲を睨みつける。

「だからアンタはアホ言うてんや! 何が俺が死んだとしてもや! 何で死ぬことが前提なん!? 何でいつも自分だけで抱え込む!!」

「…湖華」

「アンタは自分の価値観を全然理解しとらん大馬鹿者や……ッ」

「湖華、もういい」

「アンタが死んだら悲しいと思う奴もいるんや! それを忘れんな!!」

「もういい!!」

湖華に負けない大喝で言い返すと、彼女の表情がフツと緩んだ。だがそれも一瞬のこと。

堪えきれなくなったように顔をゆがめると踵を返して走り出す。那雲をその場に一人残して。

沈黙の訪れた空間。ザア、と木々が那雲を戒めるかのごとく揺らいだ。

血が上った頭が覚め、ようやく我に返ると自分がした言動に気付く。

「…ッ畜生…！俺は……また、アイツに…ッ…！」

思い浮かぶのは、皮肉にも湖華や影也に初めて会った時のこと。

『覚えていますか？那雲君は、初対面の僕にいきなり殴りかかって来たんですよ』

「馬鹿か…ッあの頃となんにも変わってねえじゃねえか…！！」

堅く握りしめた拳は皮膚を突き破り、朱の色を垂らす。

悔しかった。

また同じことを繰り返してしまう自分が。

「畜生……！！」

自分が次にすべきことは何なのか。

那雲は必死に湖華がいなくなった方向へ向けて走り出す。

答えはもう、決まっていた。

影也は、すぐにその異変に気が付いた。

二人の突然の失踪と疾走。

湖華の手を引いて慌てて逃げる那雲を遠目に目撃した。

おそらく、那雲達は奴らと出会ったに違いない。

ならば、すぐに二人と合流しなければ。

単体で行動することは、デメリットしか成さない。

それにあの那雲の慌てぶり——今の彼は情緒不安定だ。なおさらに行動をした方が賢明である。

そう思い、意識を集中させて瞬間移動テレポートを実行させようとした時。

『逃がさない』

割り込んだ声は、氷のように冷たい。

頬にあたる冷たい感覚。銃口を押し付けられた、と適当に予想した。

「これはまた……結構なご挨拶ですねえ、早峰沙帆さん？」

『三苑影也……貴男は邪魔な存在です。よって、私がここで排除します』

「へえ、僕と殺る気ですか？その勇氣は誉めてあげてもいいですよ」
気楽な調子で言い、艶麗に微笑む。

「でも、場所は選びませんか？ここは青組の応援席です」

辺りには青組のハチマキをまいた生徒達で混雑している。こんな中ではフルに暴れることはできない。

多分今影也が銃口をあてられているのに誰も気付かないのは、彼女が体操服のそでに上手く隠しているからであろう。

そもそも、機械人間アンドロイドなどという代物はこんな所で目立つてはいけな
い。

機械人間アンドロイド——沙帆は少しだけ眉を寄せた。

——その瞬間を、彼が見逃す訳がない。

『!?!』

即座にテレポートを実行。彼女の視界から消え去る。

『目標、確認——』

「チツ、さすがにやりづらいですね!」

人ごみの中では瞬間移動しても気付かれにくいものの、身動きがとりづらい。

一旦応援席を離れ、完璧に無人であろう運動場端の体育倉庫に逃げ込んだ。

だがそこは体育倉庫といっても八畳ほどの広さしかない。太陽の光が僅かに漏れる薄暗い場所で、足元にはボールやバッドなどが散らばっている、

ハッキリ言って戦うにはかなりキツイ場所だった。
でも。

（ここで僕が食い止めなければ、機械人間は確実に那雲君の元へ行く）

——戦うしかない。

『目標を完全に補足。即時に戦闘準備を開始』

薄暗い闇の中、無機質な少女の声が響く。自分を見据えるのは、感情のない二つの瞳。

（倉庫の構造からして瞬間移動の範囲は限られる。でも、これだけ物があれば自分を守る盾として使用することも可能）

勝算は、五分五分といった所だろうか。

とにかく、やるしかなかった。

『第一次攻撃開始』

ジャコツ!という音がしたかと思うと、連続して爆音が響いた。

外に漏れない程度の音だったが、衝撃を緩和しきれない壁に亀裂が走った。

影也は瞬間移動で攻撃から逃れると、彼女の背後に回り込む。

手元に先ほど触れた野球バッドを出現させると、思いっきり振りかぶる。

だが、ガツキイイーン！と甲高い金属音と共に影也の攻撃は防がれる。二本の太いアームが、器用にバッドを受け止めていた。

「く…ッ！」

沙帆は身体をひねって影也の方を向くと、腕から新たな武器を生やした。

それは人間の顔ほどの太さがある棍棒だ。彼女が動くたびに鳴る機械音が耳につく。

（マズ…ッ）

喉の奥で嫌な息が鳴った。横殴りに棍棒を振り回され、影也の華奢な体に激突する。

「グア…ッ！！」

口の端から一筋の朱が漏れた。殴打された腹部の感覚が一瞬消え、すさまじい激痛を呼び起こす。

だが倒れている暇などあるはずがない。すぐさま第二の攻撃が来る。

（この倉庫内の戦闘は分が悪すぎる！）

レポート瞬間移動など、言ってしまうばただの移動能力だ。

離れているところへ一瞬で移動する能力。

だがそれも近距離戦ではなんの意味もなさない。なんせ行動範囲に限りがありすぎるからだ。

（ここは一旦引くしかない！那雲君達と合流しなければ勝ち目はない）

動くのも酷な影也はなんとか震える二本足で立ち上がる。

棍棒が、再び迫ってきた。

彼は目を閉じ、集中する。

そして、その場から『逃げ』という名の瞬間移動レポートを実行した。

閑散とした廊下は、不気味なほど静かだった。

今だ探している湖華の姿はない。

ここは三階の廊下、つまり三年生の階だ。

運動場から聞こえる応援や歓声など、那雲の耳には入らない。

「確か……ツこつちに逃げたはずだ……」

広い廊下を走り、教室の一つ一つを念入りに確認していく。

早く見つけ出さなくては。

ただでさえ奴らが跋扈しているかもしないというのに――

と、そこで那雲の思考は一旦途切れた。いや、途絶えた。

三番目の教室の扉を勢いよく開いた瞬間。

『ソレ』は、視界に飛び込んでいた。

探していた彼女の姿。

だが、その瞳には溢れんばかりの涙が溜まっている。

理由は明白だった。

彼女は後ろから抱かれた状態で、無理矢理キスされていた。

紀崎蔭艶。

苦しそくに身をよじる彼女を押さえつけ、蔭艶は湖華に口付けを繰り返す。

舌を絡め取るように。

彼女の身体を貪るように。

その光景を見て、心の中の何かが音を立てて切れる。
見えないチカラが、体内を蹂躪する。

静かに、でも重々しく、彼を中心に風がゆっくり起きた。

やがて、それは漆黒の竜巻ともいえる突風に姿を変えていく。

漏れる言葉は自分でも驚くほど、低くて黒かった。

「……………その女を……………放せ……………」

12、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？（後書き）

すみません！更新遅れました！

何か出だしがデジャヴなのは気にしないで下さい。

頑張れ自分、頑張れ受験生。

更新ペースはどうすれば上がるのでしょうか。

13、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？

影也が瞬間移動した先は、校舎の中庭だった。
テレポート

コの字型の校舎に囲まれた中庭は、ザワザワと木が揺れている。
辺りに人の気配はなく、遠くから生徒の歓声が聞こえてくるだけだ。

「……さて、那雲君と湖華は何処に……」
言いかけて気付いた。

三階。

校舎の最上階。

何かがおかしい。

具体的な説明を求められても答えられない。

ただ、何かあそこだけ異様な『殺気』というものに満ちている。
影也がしばらくそこを凝視していると。

『ガッシャアアン！！』

「！？」

何の前触れもなく唐突に窓ガラスの一枚が砕け散った。
粉々になったガラスの破片が、中庭に降り注ぐ。

「……」

影也はそれを見届けてから三階への瞬間移動テレポートを実行した。

「……その女を……放せ……」

ゆらゆらと陽炎のように那雲の周りに風が集まる。

怒りに満ちた瞳で睨まれている蔭艶は、湖華との口付けを解くと那

雲に向き直る。

「へえ、すごい威力だね。」

薄く笑みを浮かべて気軽に話す蔭艶の腕には、しっかりと湖華が収まっていた。

「でも、そんな威力のものを俺にぶつけたら、彼女まで道連れだよ？」

那雲は黙って蔭艶を見据える。湖華が悲痛な声で叫んだ。

「那雲！ウチに構わんでやれ！！」

「煩いなあ。もう一度塞がれてもいいの？□…」

湖華は涙を拭くと蔭艶を見据えた。

体操服のポケットに入っているKSFのプログラムを、掴まれている左手で取り出すと蔭艶の頭上に翳す。

「……なんのつもり？」

少しだけ蔭艶の目線が細まる。

「ウチを放さんなら、アンタを倒すまでや」

「……分子操作」

「この紙の重さを数百キロまで跳ね上げた。アンタの体が一瞬で潰れるくらいの重さに」

「……………」

蔭艶がしばらく黙る。

——もちろん、湖華がその僅かな隙を逃す訳がない。

大きく身をよじって蔭艶の腕から逃れると、すぐさま距離をとる。

「那雲！今や！！」

湖華の声とほぼ同時に暴風の塊が蔭艶に向かって突進する。

その暴風の余波で、廊下の壁に薄く亀裂が走った。

「ッ！！」

だが、蔭艶は間一髪でこれを避けることに成功する。その頬にわずかに暴風が走り、うすく皮膚を破って朱を撒き散らした。

狙いを失った暴風の塊は、廊下に面した窓ガラスを粉々に砕く。

「くそッ！外した！！」

すぐさま湖華の元に駆け寄ると、彼女を庇うように立ちふさがった。蔭艶が切れた頬を押さえ、こちらを振り返る。

「調子に乗るなよ…涼原那雲おおおお!!」

怒号とともに、彼は懷から何かを取り出した。

それを、那雲達に向かって投げつける。

「!?!」

すさまじい勢いで加速したビービー弾が、那雲を貫こうと迫って来る。

(やべエ、防げな——ッ!?)

思わず湖華を庇おうと抱きしめた那雲だったが、彼をビービー弾が貫くことはなかった。

何故なら。

突如として出現した長机が、那雲を守るように目の前に落ちてきたからだ。

加速したビービー弾によって長机には凹凸ができてしまったが。

「……ッ、間に合い…ました、ね…」

「影也!!」

息を切らして呼吸を整えている影也が、廊下の端から現れる。

一息もつかぬ間に、影也は叫んだ。

「今のビービー弾の威力…普通では不自然なほど強い…貴方は、もしかして…」

「超能力者、だよ」

代わりとばかりに蔭艶が言い放った。

驚愕の色を浮かべる同じ超能力者三人を嘲るように、蔭艶は語りだす。

「俺の誕生日は今から15年前の9月18日…お前らと同じだ!!」

「どういうことや…? 影也は今年の一年生の誕生日を全部確認したはずや! 超能力者を探すために!!」

「フン…分かる訳がない…俺はすべての自分の詳細を偽ってここに入学した！お前らを…捕らえるためになあ！！」

その瞬間、那雲を含む全員が混乱した。代表して、影也が問う。

「何故、貴方は機械人間^{アンドロイド}達の味方なんです！？あの病院は、僕達をこんな風に生み出した敵^{かたき}です！そこに協力するなんて…ッ」

「ああ、俺も最初は憎かったさ。両親を殺され、体に訳の分からない力まで宿されて…！」

「なら、何故……」

蔭艶は壊れたように笑い出した。前髪をかき上げ、狂気の意を含む瞳で睨む。

「ある日、俺は気付いた。こんな風に脅えて過ごすくらいなら、奴らの飼い犬になってやろうとな！！そう思い、病院に行ったら院長に快く迎えられたさ！そうして俺に今回『飼い犬』として与えられた仕事は、お前らを捕らえて病院に渡す事。楽しかったぜ？お前らが寄り添い、互いを励ましあう馬鹿な姿を見た時はな！！」

わなわなと那雲の唇が震えた。感じた只一つの感情は『恐怖』だった。

「俺の持つ超能力は、物体の運動の速さを自由に変えられるもの。

『速度変更』といったところだな」

「やはり…先ほどのビービー弾は、貴方の超能力によって速さを増したものでしたか…」

蔭艶は、手の中で武器となるビービー弾を転がしながら言う。

「倉庫に火を放ったのは俺だよ。涼原那雲によって計画は失敗したがな」

「思った通り…」

まさに影也の予想は的中した。

「ガラスを割ったのも俺だ。ビービー弾を、音速に近い速さで投げて窓ガラスを割る。そうして俺はお前らに嘘の依頼を持ちかけて誘い込んだ」

静まり返った廊下に、生徒の声援と放送委員の実況が響く。

那雲は、ついに喉まで出かかった言葉を口にした。

「あの病院は、俺達に何をしようとしている…機械人間^{アンドロイド}まで作って…！」

「さあな？俺はただの奴らの『飼い犬』だ。計画の要など知らない。ただ……」

全壊した窓から流れ込む風は、やけに冷たく感じた。

「院長の素振りから見ると、計画の中核を担うのはお前だ、涼原那雲。俺や早峰沙帆、三苑影也、秋ノ宮湖華はその『保険』にすぎない」

「！？」

「あの病院…『南鶴城ヶ丘総合医療病院』は狂っている…表向きは普通の総合病院だが、裏では生身の人間での超能力実験といったところだろうか」

「嘘…だろ…」

否定してほしかった。自分が、重要な計画の核など嘘だ。そう言っ
てほしかった。

「嘘じゃないな。それならば俺や早峰^{あいつ}がこんなにも必死になる訳がない」

「黙れええええええ！！」

突発的に起こる暴風。

最大級のハリケーンをも超える勢いの暴風が巻き起こった。

それはすべての窓ガラスを粉々に砕き、教室の机や椅子をなぎ倒した。

「那雲、おちつくんや！」

「那雲君！」

二人の言葉はもはや耳に届いていない。

なおもがむしやりに風を撒き散らせる那雲の様子を見て、蔭艶は虚空に向かって「沙帆」と呼びかける。

それだけで、機械人間^{アンドロイド}の少女が空間から突如現れた。

「沙帆、アイツを倒すぞ」

『…危険度7と推定。しばし時間を置くことを進めます』

「いーや、暴走状態に陥っている今しかない。行くぞ」

二人は、戦闘態勢をとった。じり、と蔭艶が重心を落とす。

「那雲はやらせへん！」

「加勢しますよ、湖華」

異能力研究部と、にらみ合う蔭艶達。

やがて、蔭艶は薄く汚れた笑みを貼り付けて言う。

「ガチバトルってとこかな？まあ…俺らも全力でいかせてもらおう！
」

13、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？（後書き）

次でK S F編は終了の予定です。

多分、終了…できることを祈ってください。↑おい

14、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？

——一方、運動場では三年生による綱引きが行われようとしていた。

この綱引きが終了すると各色の中間結果が発表、および昼食時間ランチタイムに入る。

一口に『綱引き』というと幼稚な競技に聞こえるかもしれない。だが、目の前の空気はお遊戯とは思えないほど煮えている。うっかり中心に入ろうものならその瞳の鋭さに射殺されそうなほどだ。三年生にとっては最後のK S F。よってこのように闘志を燃やすのも無理はない。

神社の注連縄並みに太い綱の中心で向かい合うのは紅組と青組の先頭。

ちなみにこの競技は『紅組、白組、オレンジ組』VS『青組、緑組、紫組』という風にチームは二つに分かれる。

中心に立った、生徒達の熱意に若干引き気味な女教師がゆっくりと右手を掲げた。

その手には銃が握られている。まもなく開始の合図だ。

——そんな一連の流れを山川海風は固唾を吞んで見守っていた。なにせこの競技が終われば昼食。彼のテンションはMAXになろうとしている。

右手にもったクラス旗を、ここぞとばかりに掲げた。バサッ、と小気味いい音とともに旗が翻る。

『青組、ファイトおおおおおおお！！』

クラス中の熱気と歓声を浴び、満足そうに頬を緩めた。見れば、他の色も自分達の旗を振っている。

頭上を見上げ旗を振る孤軍奮闘中の海風は、そこで何かに気付いた。
「あれ、那雲か…？」

上ばかり見ていたおかげで気付けた。校舎の屋上には黒い長髪の人物が立っていたのだ。

ここからだとは大分距離があるため表情までは読み取れないが、ぎこちない動作で焦りが伝わってくる。

「何やってんだ、アイツ…？」

眉をしかめた海風だったが、その小さな疑問は競技開始の合図と共に忘れ去ってしまった。

「あーくそっ！！何だっただよテメエらはああ！！」

呼吸を乱しながら振り返る。止まることを知らずに流れ出る汗が気持ち悪い。

蔭艶と早峰紗帆。

二人は那雲達三人の攻撃に怯むどころかそれ以上の動きをしていた。こちらの状況を正確に読み取った上で攻撃を仕掛けてくる。

しかもその攻撃のタイミングが絶妙なのだ。絶対に避けられないであろう角度から狙ってくる。

「これは…」

「厳しいかもしれん」

影也の言葉を湖華が引き継ぐ。二人とも那雲同様、戦闘のため疲労困憊な様子は明らかだった。

「駄目だなあ、あれだけ言っておいて…もうボロボロじゃん」

対して蔭艶は余裕の表情で屋上に繋がる階段を上る。那雲達はいかに校舎の最上階にまで追い詰められていたのだ。

蔭艶の言う通り、那雲達はもう限界に近かった。影也の体操服は砂塵で汚れており、湖華に至っては上部分が大きく破れている。

これ以上戦うものなら倒れるのも時間の問題だ。

「そろそろトドメ刺しちゃおうか？紗帆」

『…むしろ何故今まで刺さなかったのか不思議です』

小馬鹿にしたようなやりとりを交わすと、肉食獣のように獰猛に舌なめずりする。

「もっと楽しませてくれるのかと思ったけど…残念だ」

言って、蔭艶は紗帆の華奢な腕を掴むと——そのまま引きちぎった。「ッ!？」

啞然とする那雲達をよそに蔭艶は、いつのまにか金属バットに変形した紗帆の腕を構える。

「なあ涼原那雲、言ったよな？俺は触れた物体のスピードの速さを変更できる」と

「…だから、何だ」

来る、直感がそう告げていた。

おそらく蔭艶は次の一撃で那雲を始末するつもりだ。最大限の力を振り絞ってでも。

だが、逆に言えばその一撃をかわせば反撃するチャンスが残る。

早く逃げるべきか——いや、あの機械人間アンドロイドが傍らに控えている。腕

を一本失っているとはいえ、逃げててもあいつに捕まってしまうだろう。

（やはり、かわすしかない!!）

グツとボロボロの拳を握り締める。これ以上動くな、と体が訴えているようだった。

「でもな」

急に蔭艶は重心を低くした。思わず一步後ずさる。

「自分を対象にすれば、こんなこともできるんだ——よ!!」

瞬間、蔭艶が消えた。いや、消えたように見えた。

（瞬間移動!?!いや、違う!何が——!?!）

「那雲、後ろや!!」

掠れた湖華の叫びに背後を振り返ると、蔭艶が金属バットを振りかぶる所だった。

「!!」

「ハッ、驚いたって顔してんじゃねえか!!俺は自分の走るスピードを変えたただだっつーの!!」

逃げなければ、でも間に合わない。

那雲がよけるより早くにあの金属バットが飛んで来る。

あんな勢いのものが頭に直撃すれば——

ゾツとした考えが頭に過ぎった。

それが、決定打。

「馬鹿みてえに立ちすくみやがって!!これ一発でデメエはお陀仏だよ!!」

「!!」

思考が停止する。

ゆっくりと、本当にゆっくりと金属バットが振り下ろされた。

もはや、これまでか。

そう思った瞬間。

だからこそ。

目の前に、自分を庇うような位置に立ちふさがった湖華を信じられなかった。

ゴツ、と鈍い音が響く。

湖華の華奢な体が横なぎに投げ飛ばされた。

綺麗な弧を描いて飛んだ湖華は、フェンスに強打され倒れる。

「は……？」

殴った蔭艷本人でさえ、そして影也は啞然とした。

頭が真つ白になっていた那雲も、倒れた湖華の腹部から流れる鮮血で我に返る。

湖華が自分を庇った。

自分なんかの為に。

あんなに体操服を真つ赤に染めて。

湖華の頭に巻かれたオレンジ色のハチマキが、ひらりと解けて風に舞った。

「――」

憎む相手は誰だ？

自分か？

あんな小さな少女に全部を背負わせてしまった自分なのか？

――いいや、違う。

「俺が憎む相手は――」

俯く那雲の周りに、小さな風が起こる。

やがて、その風はゴウゴウと音を立てて円を描き出した。

すなわち、竜巻。

「お前だああああああああああッッ！！」

ドッゴオオオオ！！と空気を切り裂きながら、竜巻は蔭艷を狙って爆発する。

「ッッ！！」

瓦礫の雨の中を器用によける蔭艷。

だがどれだけ逃げようと、竜巻は標的を見失うことはない。

影也は巻き込まれないよう、湖華の傍らに瞬間移動する。

那雲はなおも攻撃を止めない。その体を中心に、無数の空気ですべき系が発生する。

系は、蔭艶の四肢を切断する目的で空気を切り裂いた。

「クッ！！」

だが、すんでのところで蔭艶に触れられ、その速度を失い空中に霧散する。

蔭艶は攻撃を碎いた隙に、懷から親指大ほどの金属球を取り出す。

「さつさと倒れる涼原那雲おおお！！」

「ああああああああああッ！！」

二人の絶叫が重なった時。

グチュリ、と嫌な音が響いた。

音源は、那雲の左肩。

——蔭艶の金属球が、那雲の左肩を貫通したのだ。

「……あ」

朱が、嘔き出す。

湖華のものよりも少し黒ずんだ朱が。

カク、と両膝を突いた。

激痛で唇が震え、目が見開かれる。

何かを言う前に、那雲は左肩を抑えて汚く冷たいコンクリートに倒れ込んだ。

「那雲くん！！」

影也が悲痛な声を上げるが、那雲はピクリとも反応しなかった。少し遅れて、蔭艶がにんまりと笑みを浮かべる。

「——フン。ようやく倒れたか」

『では、送球に南鶴城ヶ丘総合病院に連衡しましょう』

皮肉なほど感情が決裂した機会人間の声^{アントロイデ}が、耳に刺さった。動こうにも、動けない。

影也は今、湖華に自分の体操服の布を利用して簡単な止血を施している最中だった。

安易に齒向かって湖華の元を離れれば、彼女の命が脅かされる。

（かと言つて、那雲くんを渡す訳にもいかない…ッ！）

ギリ、と何もできない自分がもどかしく齒軋りする。

そうこうしている間にも、蔭艶は那雲を見下ろすかのように目の前に立った。

そして、その頭を踏みつける。

漆黒の長髪が散らばった。

「さあて、ここまで手こずらせやがって。テメエはゆっくりおねんねでもしてろっつーの」

瞳を歪ませ、残虐な笑顔を作る蔭艶の後ろ姿を、影也は視線だけで射抜いた。

「おい紗帆！とつとこいつを運——」

言いかけた蔭艶の言葉が、途中なのも関わらず停止した。理由は明白。

始め、聞き間違いかと思つた蔭艶は静かに辺りを見渡す。

だが、手首を誰かに掴まれ驚いて視線を戻す。

そこには——

「悪いな…俺は…ッ…まだ、寝てやれねえみてえ…だ」

那雲が、立ち上がっていた。

「なッ——！？」

左肩からボトボトと鮮血を流しながら。影也の背に、寒気が走る。見れば、唇からも血が垂れている。とても立ち上がれる状態ではなかった。

「な、ぜ——立てる——！？」

驚愕で震える蔭艶の手首を、千切れんばかりの勢いで握り締める。

「！？、ぐ——ああああああああッ！——」

那雲の爪が、蔭艶の柔らかい手の甲に食い込んだ。肉を挟まれ絶叫する。

とっさに自分から離れた蔭艶を、那雲は殺気が宿る瞳で睨んだ。

「てめえが寝るんだ——よ——！」

ドン、と右足でコンクリートを踏みつける。

それだけでドゴッ——！と那雲を中心に地面が吹き飛んだ。

足元から地中に空気を入れ、それを一瞬で膨張させ爆発させたのだ。那雲懇親の攻撃をともに浴びた蔭艶が、衝撃で倒れこむ。

「う……ア……」

「形成逆転——だよな？」

丁度その時、運動場からパンと競技終了の乾いた合図が響いた。

『只今の綱引き、勝利は青組を含む三つのチームだあああ——！！』

オオオオオッ、とどう聞いても山川の声であろう歓声が響き渡る。

那雲は片手で自分の組——青組のハチマキを掴むと、蔭艶の眼前に翳す。

「勝った」

蔭艶の気絶と同時に、機械人間アントロイドの紗帆も『これ以上の戦闘は無謀』と吐き捨て、蔭艶を抱えてその場から消え失せた。

だが、デカイ口を叩きすぎたのか、その直後に那雲は氣絶した。

影也は慌てて、被害を蒙った那雲と湖華二人を瞬間移動レポートで運動場付近まで運んだのだった。

過去の鶴城ヶ丘の運動会で、闘志を燃やしすぎて怪我をした生徒が続出したため、毎年K S Fには近所の医者が一人付くことになったらしい。

そこが運の良い所で、影也は二人をその医者のいる場所に運んだ。医者は『何をどうしたらここまで酷い怪我をするんだ』と驚いていたが、すぐに二人を治療してくれた。

ちなみに影也は『彼らはK S Fのテンションでハイになって大怪我をしてしまいました』とまたもや苦しい言い訳をしたらしい。だがまあ、そのおかげで那雲と湖華は大事にならずに済んだ。

で、K S Fが終了した今現在はいつものように部室に三人そろっている。

「そういえば、結局どの色の組が優勝やったんや？」

もう動けるほどに回復した湖華は、調子に乗ってガバガバ紅茶を飲んでいた。

影也はティーカップを整理しながら興味なさそうに言う。

「たしか紫組でしたよ、初優勝とかでクラスで打ち上げするらしいです」

「んだよそりゃあ、つつか綱引きと借り物競争は青組が一位じゃねえか」

左肩に巻いた包帯を鬱陶しそうに眺め、那雲はティーカップに手を伸ばす。

「でも昼休み後の競技で紫組が突如逆転したんですよ、あと僕のせいではありません」

影也はカップについた埃を小さなワイパーで払う。

「あと青組は三位やったはず。二位がオレンジでな」

「……だからあの後保健室に見舞いに来た山川は泣いてたのか」

『那雲がいてくれたら絶対優勝だったのに』とぼざいていた山川を思い出し、紅茶を一口含んだ。

「……でも」

不意に、影也は食器棚から視線を外した。

「あの総合病院の迷惑がだんだんと見えてきました。次に来るのはいつになるか分かりませんが……そう遠い日ではないはず」

急にその話題を出され、二人はしばし黙る。

だが、那雲は呆れたようにカップを机に置いた。

「そのためにこの『金持ち部』があるんだろ？なら、俺達の目標は只一つ——強くなることじゃねえのか？」

驚いたような表情を作る影也。だが、それはすぐに淡い微笑へ変わった。

「——そうですね」

湖華も勢いよくカップを置く。衝撃で紅茶が零れたが微塵も気にしない。

「なら、ウチがビシビシ鍛えたる！まずは、この八つ橋試食会からや！」

ドドン、と『きゅうり八つ橋』とプリントされた箱を突き出す湖華に、那雲の顔が青ざめた。

「ま、待て……今すぐ食えはないだろ……っておい、無理やり口に入れるなッ！……っごおおお！？」

周りから見れば『あーん』の構図なのだが二人は全く気付かない。いつもの風景に、影也はため息を漏らした。

——もつとも、その『いつもの風景』がずっと続くのかは分からないが。

せめて今だけはこの二人のお守り役でもいいか、と影也は憂いを含んだ表情で呟いた。

>
 i
 3
 7
 3
 4
 4
 4
 —
 3
 5
 9
 6
 <

14、K S F（鶴城ヶ丘スポーツフェスティバル）？（後書き）

調子に乗って挿絵まで描いてしまった山吹です。

調子に乗りすぎました、すみません。

あ、汚いのは自覚済みです。

あともう一つ。

投稿遅れて申し訳ありませんでしたああ！↑またか

11、12月といえばテストの月だったのです。言い訳です、ハイ。受験生なのかなんのか知りませんが、PC禁止令が出てしまっています。

これからはペース上げていきたいです。嘘です。またもやテストあります。

というわけで次の投稿はいつになるか未定ですが、気長に待つて頂けたら幸いです！今回はこれで失礼します！

15、訪れる初夏と雑談（前書き）

無駄に長くなってしまった今回の話。

特にヤマ場はなく、三人がわーわー言ってるだけです。

でもあのノリを書くのは結構楽しかったりしますね。

ちなみに調子にのって名前変えました。

私が世界で一番好きな苗字は『夏目』だったりします。

15、訪れる初夏と雑談

ぼんやりとした淡い照明の中、一人の男がパソコンのキーボードを叩く。

男は、白髪交じりの黒髪をかき上げる。皺が刻まれた口元が、面白くなさそうに歪んだ。

『南鶴城ヶ丘総合病院』と書かれた封筒の束に目をやる。机は書類や封筒の山で溢れていた。

その封筒に記されている病院名は、この男が院長を務める病院の名前。

「早峰」

その一言だけで、まるで始めからいたかのように一人の少女が現れる。

『……なにか御用でしょうか、院長』

少女の瞳は完全に生氣というものが欠落していた。虚ろな瞳で、パソコン画面に視線をやる。

「紀崎蔭艶はどうだ」

『現在は順調に回復しています。学校も辞めました』

「…そうか、まああれは精神ダメージの方が大きいだろうが、な」
大して興味もなさそうに男は紗帆を振り返る。

小さなパソコン画面には、一人の少女の画像と詳細が記されていた。画像が荒いたため細部まで見ることはできないが、それは街のどこかに付けた監視カメラで撮影したような画像だった。

もしかして本当に監視カメラを町中に仕掛けているのかもしれないが——紗帆にとってはどうでもよいことだ。

——この男は、生身の人体での超能力実験をも平気でやってのける

男なのだから。

そして自分も、この男に機械人間アンドロイドにされた。

男は、机を人差し指でトントンと叩きながら言う。

「新たな超能力者が見つかった」

『——、』

紗帆の眉がほんの微かに動いた。——が、それだけだった。

「驚いたよ、てっきり死んだものだとはばかり思っていたが……しかも涼原那雲達と同じ学校に通っているとは」

『……捕獲、および始末しますか？』

男は暫し画面を見つめる。

「——いや、放置しても問題はない。そもそも奴は攻撃タイプの超能力者ではないからな、とんだ欠陥品といった所だ」

『……そうですか』

内心、暇だったのでその少女で弄ぶのもいいと物騒なことを考えていた紗帆だったが仕方ない。男の命令は絶対だ。いんちゆう

「ただ、もしも涼原那雲達と接触した場合……少し面白そうなことになるそうだ」

ふと、男が机を叩く指を止める。舐めるように画面を見つめると、不気味に笑った。

『その少女の名を、教えていただけますか……？』

紗帆の不意の質問にも、男は全く躊躇う様子も見せず呟いた。

「その少女の名は——」

深夜。その中でも特に闇の色が濃くなる丑三つ時。

満天の星が瞬く——まではいかないがポツポツと星が照る夜空に、生暖かい夏色の風。

6月も終わろうとしている今日この頃は、少しずつ町も夏の気配を帯びてきた。

大半の民家の明かりは、とうに消えている。

だが、ある古びたアパートの一室には薄暗い照明が光っていた。

そのアパートは、どこにでもありそうな普通のアパートだ。差し詰め大きさは2LDKより少し小さいくらいだろう。

「くそが…ッ、厄介なことになりやがって…」

室内は、これでもかというほど冷房が効いていた。その部屋の主——那雲の黒い長髪も、現在は暑いため後ろで束ねられている。まるでサムライのような恰好だ。

そんな那雲の手元には、人間の拳二つ分程の人形が握られていた。

「くそおおっ！折角新作が出たから買ってやったのになんだよこのザマは—！」

その人形は、円らな瞳に人を一発で和ませる表情を浮かべた——いわゆる『ゆるキャラ』というやつだ。

余談だがこの人形、名を『かまぼっこん』と言い、その名の通りかまぼこをモデルに作られたキャラクターだ。

現在は小中学生に人気をあつめている模様で、至るところにオフィシャルショップが建設されている。

何を隠そう那雲は、このぬいぐるみ会社のぬいぐるみはすべて揃えているのだ。

アンドロイド機械人間達も騒ぎが起こるのが困るのか、自宅までは襲ってこない。なのでこのアパートは那雲の唯一の安らぎ場所である。よって、自室がこのような趣味全開の世界になるのも無理はない。

だが、その人形は腹部にあたる部分が大きく裂けてしまい、中から綿が飛び出してしまっていた。

「俺のかまぼっくんが…ッ、確か前回買った『とまとん君』も手かとれちまったし…」

高校男子がレジへ持つていくには大分勇気のいる代物を眺め、那雲は大きいため息を漏らした。

「仕方ねえな…面倒くせえが縫うか」

漆黒の長髪を揺らして立ち上がった那雲は、彼の人格とは一致しない綺麗に整理された部屋を眺めると、ベッド下の収納スペースに目を留めた。

その収納スペースを開くと、中から大量の人形が溢れ出る。

その空間だけ見ると、小学生の女の子の部屋なのかと錯覚させるほどだ。

彼は人形の山の中から裁縫道具を取り出し、針に糸を通すと器用に破損した部位を縫い合わせる。

それは高校生男子とは思えないほど見事な手腕だった。

あっという間に破れ目は塞がり、『かまぼっくん』は買った時とほぼ同じ状態に戻った。

「こんなもんか…よかったなかまぼっくん…」

普段の彼には考えられないほど柔らかな微笑を浮かべる。

と、そこで唐突に携帯の着信が鳴り響いた。

ピピピ、という喧しい音に怪訝に目を細め、ベッドに置かれている携帯を開く。

『新着メール一件』というボタンを押すと、すぐさまメールが表示

された。

それは、影也からだった。(ちなみにメルアドは何故か入学当初に影也に知られていた。つくづく恐ろしい奴である)

文面には、愉快的顔文字とともにこう綴られている。

『こんばんわー那雲くん まさかもう寝てるなんてことはありませんよね？w用件は一つだけで、今すぐ僕の家まで来てください♪じやあばいちー(＾0＾』

秒速で那雲の顔が歪んだ。手にしたかまぼっこんが握り締められる。……果てしなくウゼエメールだな…っつか、夜中に家に来いって夜這いかアイツ…気でも狂ったのか？

「いえいえ…これでもシラフですよ あと夜這いじゃないですからー」

「馬鹿か…んな訳ねえだろってあああああああああ！？」

「あ、どうもお邪魔してます」

「なに完璧な笑顔で言ってるんだコラああ！つか不法侵入で殺すぞてめえ！！」

いつの間にか影也は隣でくつろいでいた。進入方法は言うまでもなく瞬間移動である。レポート

簡素なTシャツとズボンに身を包んだ影也は、亜麻色の髪を揺らし、ニッコリと微笑んだ。

耐性がない人間が見たら一発で恋に堕ちるだろう。

「つか来いっつったのテメエだろ。何で逆に俺んちに来てるといのかどうやって住所調べた」

「まあまあ落ち着いて」

「これが落ち着ける訳あるかあああああああ！！」

錯乱する那雲をよそに勝手に机に腰かける影也。

「いやー思い返してみれば那雲君、僕の家知らないよなーと思いまして」

「当たり前だクソボケ！」

「だから僕がわざわざお迎えに来てあげたんですよー」

『わざわざ』という部分をやけに強調させて言う影也に、那雲は引きつり笑いを浮かべた。

「つーか、何で今からそんな面倒なこと…俺は行かねえぞ」

吐き捨ててそっぽを向く那雲に、影也はとても可憐な微笑を浮かべた。これが漫画なら確実に周囲に花が散っていることだろう。

「あれ…？そんなこと言っていないのかな、那雲くん？」

「はあ？」

何やらとてもマズイ予感がする。アイツがこういう表情をする時は、大抵口なことが起きない。

「高校生にもなつてゆるきやらマスコット集めが趣味…だなんて皆に知れたらどうなるんでしょーね？」

「おおおおおおおおおおいッ！！てめえ、覗き見しやがったなああああ！！」

那雲は若干涙目だ。背中に隠してある『かまぼっこん』の顔も歪んでいた。

「あんなクールで冷静沈着な那雲君が、そんな可愛い物品を…？やだーカワイイ… みたいになりかねませんよねえ？」

「それお前の本音だろおおおッ、つかマジで簡便してください！何でもしますからああああ！！」

ゴンゴンと頭を床に押し付けて土下座しまくる那雲。だが、不意にそれをやめると横を向いて蚊の鳴くような声で呟く。

「つか…しょうがねえだろ…昔から両親こいじんいなくて、家に人形こいじんしかいなかったんだよ」

その小さな呟きを確かに聞き取った影也は、しばし沈黙した後わざとらしい溜息をつく。

そして吹っ切れたように瞬間移動で那雲の眼前まで移動すると、最上級の微笑みを浮かべた。

まるで、母親が子供をあやすように。

「じゃあ、行きましようか那雲君」

「……あア」

何にせよ、那雲に勝ち目は無かった。

ヒュ、と空を切る音と共に深夜の路上に二人の少年が現れる。

偶然その場を目撃した酔っ払いのサラリーマンは、ギョツとしたような表情をしたのち「疲れているのか？」という仕草で頭をかいた。サラリーマンが去った後、少年達はホツと肩をなで下ろす。

「……つかよお」

「何ですか那雲君？」

那雲も深夜だということに気をきかせたのか、やや控え目の音量で言った。

「何で直接お前んちに瞬間移動しねえんだよ？中途半端に外に出ると暑いじゃねーか……」

「んー……」

影也はどう説明するか迷った後、落ち着いて話す。

「僕の瞬間移動テレポートには不思議と限度があるんです。多分その限界は半径一キロ程。那雲君の家から僕の家までは距離がありすぎるんですよ」

「……初めて聞いたぞオイ」

「あれ、そうでしたっけ？」

軽い様子で言う影也に、那雲はツツコミを入れた。

「まあでも今僕らがいる場所は、那雲君の家から丁度一キロほど離れた地点。次の瞬間移動で僕の家まで行けますよ」

影也が那雲の肩に触れる。瞬間移動は触れた物体しか移動させることができないからだ。

一瞬感じる無重力感。感覚的には、ビルの最上階から一階まで一気にエレベーターで降りるような感じだ。当然ながら決して気持ちの良いものではない。

視界がブレ、次にはもう別の場所だった。細い通りに立つ住宅街に、一件だけ立つアパート。どうやらこの茶色いアパートが影也の自宅のようだ。

闇を照らす街灯には無数の蛾が集まっている。その光の眩しさに那雲は目を覆った。いきなり暗闇から明るい場所に出ると目が慣れない。

だから、那雲は気付かなかった。

自身の目の前に、闇に溶けるような黒塗りの外車が止まっていることに。

そして、その車からスーツをばつちり着こなした青年が出てきた。

思わず身構えた那雲だったが、その青年の整った容姿に啞然とする。どうして自分の周りにはこう美形が多いのだろうか…

そしてその青年は、後部座席のドアを丁寧を開く。動作の一つ一つが優雅だ。

「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

「悪いな、すぐ済ませてくるわ」

後部座席から青年にエスコートされるように出てきたのは、那雲のよく見知った人物だった。

「こ、湖華！？お前マジでお嬢様だったのか…」

この場に湖華が呼ばれていたことも驚いたが、目の前の光景の方が啞然茫然だ。

すると湖華はムツとしたように口を尖らせる。

「なんや那雲、ウチが偽物のお嬢様だと思っとなんか？」

「んなこと言ってねえっつの…」

やや語尾が頼りないのは、慌てて湖華から目を逸らしたからである。なぜなら、彼女は風呂上りなのか薄手のネグリジェ一枚にストールを羽織っただけの恰好だった。

夏用の薄い服は彼女の身体の色々な部分を浮かび上がらせ、何やら危うい無防備さを演出していた。いつものピンクのリボンを外してあり、ゆるくカールした栗色の髪には水滴が付着している。

（っ！か目のやり場が…ッあああ何かシャンプーらしき香りまでチクシヨウ何の仕打ちだコレ）

一人でパラダイス状態の那雲の顔面に、容赦ない湖華の肘鉄が叩き込まれた。衝撃で電柱に激突する。（地味に痛い）

「なんやフワフワしよって…那雲意外と夜弱いタイプか？」

夜とかそんなじゃねえよ…と路上に倒れたまま呟く那雲。何故か湖華の執事らしき美青年が顔を顰めた。

「お嬢様…まさかこのアスファルトとお友達状態の方がお嬢様が最近お気になさっていい」

「ちょおおおおお、何言うてんや溜^ど季！？さっさと車に戻れ！！」

即効で言葉を被せた湖華に謎を覚える那雲。影也は意味ありげに微笑んでいる。

湖華にそれを尋ねようとした所、何故か赤い顔で睨まれ話題を逸ら

されてしまった。何だったのだろうか？

「そつえば那雲は初対面やったな、コイツはウチの執事やっとなる
稜条瑠季や」

湖華の紹介と共に、青年は恭しくお辞儀する。那雲はこんな完璧な礼を初めて見た。

藤色かった黒髪も、均整の取れすぎている容姿といい、見ているだけで別次元に入り込んだかのようなようだ。

だが、瑠季は先ほどからなにやら那雲を探るような目つきで見つめており、およそ友好的とはいえない。

何か良くないことでもしたのだろうか？と那雲が記憶を辿っていると、ツカツカとこちらに歩み寄ってくる。

そして聞こえないくらいの小声で一言。

「失礼承知で申し上げますが…貴方がお嬢様を口説き落とした挙句、強引にキスマでしたという少年で御座いますか？」

「はあああああッ！？違いよ！ブッコロスぞデメエー！」

というかそれは紀崎蔭艶だろう、完璧人違いだこの野郎、と心中で絶叫する。

予想外の大否定に啞然とした様子の瑠季だったが、すぐに笑顔（営業スマイルとも言つ）を浮かべると一礼する。

「そうでしたか、これは大変ご無礼を致しました。ただ……」

ガシツ、と那雲の両肩にものすごい力が加わる。本気でコイツも超能力者では、と疑ったほどだ。

「お嬢様に手エ出したら、原型も分からない程にグチャグチャにしますよ」

「……………」

影也の数倍は恐怖を覚える笑顔で言われ、初夏にも関わらず冷たい汗が垂れた。

「では、私はこれ^{わたくし}で」

踵を返して車に向かう瑠季に、啞然とする那雲。多分、最初の質問で肯定していたら確実に殺^やられていた。

湖華は心底呆れた様子で、硬直状態の那雲を無視すると影也に尋ねる。

「で、用事っちゅうのは何なんや」

「あ、そうでしたね。もう何なんで此处で話しましょう」

ようやく通常に戻った那雲も、会話に参加しようと湖華と影也の間に割って入る。

「実は、那雲君に重大なお知らせがあって呼んだんです」

「はあ？何だよ」

急に話題を振られ、純粹に疑問を浮かべた。

「実は、僕達二年生は明日から二泊三日の野外教育活動なんですよ」

「ああ、二年全員でどっかの山奥に行くキャンプみたいなモンだろ？それがどうしたんだよ」

それと自分とがどう関連しているのかが分からないという様子の那雲。

湖華は納得したように言った。

「用はウチらがいなくなるから、その間気をつけろっちゅうことやな」

「？、何に気をつけるんだよ」

「相変わらず那雲君の頭の中はスッカス力ですね」

地味にグサリとくる言葉を吐かれ、若干傷ついた那雲だが言い返せないのが悔しい。

「機械人間^{アンドロイド}や病院の連中はもちろん、その他教師にも襲われないようにですよ」

「はあ？何で教師にまで襲われなきゃなんねえんだよ、意味分かん

ねえな」

湖華は仕切りなおすようにストールを羽織る。

「あれや、そもそも『金持ち部』は教師陣の中ではあまりよく思われとらん」

確かに何度も学校の備品を破壊されれば嫌気もさすだろう、と妙に納得する那雲。

「今までは、湖華の存在もあってこの金持ち部は廃部にされずにすんできたんです。でも…」

「ウチがおらんとすると、金持ち部を廃部にしたい教師達がこぞつて因縁をつけに来るやろうな」

二人で説明を引き継ぐ形に、那雲は大いに理解した。湖華は社長令嬢だ、なので教師達も彼女には逆らえない。

「つまり、湖華達が留守の間に『金持ち部』を守れ…そういうことだろ？」

「ええ」

「そういうことやな」

というかこれを言うただけに集まったのか、としばし那雲は呆れる。

だがまあ影也の家も分かったし、湖華の執事も見れたから良いかと半ば無理やり納得する。

「んじゃ、用件はそれだけだよな」

コクンと頷く影也。湖華は大きく伸びをした。

「解散や、解散。ウチもそろそろ眠くなってきたわー」

瑠季の待つ車に戻る湖華を見送り、影也は「家まで送りますよ」と
レポート瞬間移動を実行する。

だが、那雲はこの時まだ予想もつかなかった。

湖華と影也がいない間、彼は新たな『出会い』に翻弄されることになるのを…

15、訪れる初夏と雑談（後書き）

キャラクター紹介7

● 稜条瑠季りょうじょう るき

秋ノ宮家の執事さん。湖華loveの過保護執事。

何やら元ヤンだったという噂もあるが、真相は不明。

昔、超能力のせいで孤独だった湖華を変えた人物の一人。

年齢は23と若く、ルックスも良いため歩いているとホストに間違われるらしい。

運動神経が非常に高く、屋敷の屋根掃除などはお手の物。性格は『よく分からない』ミステリアス執事。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8551t/>

私立鶴城ヶ丘高校異能力研究部

2012年1月11日17時54分発行